

土 淨

昭和十五年五月廿日第三種郵便認可(毎月一回一日發行)
昭和十五年十一月廿日印刷
昭和十五年十二月一日發行

第六卷 第十二號



號 月 二 十

陸海軍 慰問浄土 病院

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に二ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に六千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十萬冊以上の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御參加をお願ひ致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇ 全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇ 一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇ 毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇ 個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇ 御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

!! 々 嘖評好! 篇名

佐藤春夫著・小杉放菴挿繪並装幀

法然上人
別傳

掬水譚

きく すわ ものたれ

文豪佐藤先生の流麗圓滑の文と畫壇の雄小杉畫
伯の枯淡風雅な挿繪になる昭和に生きた法然上人傳!

宗教文藝の精髓・千載に光彩を放つ。

過般大毎東日兩紙に連載し、百萬の讀者を魅了したるもの。俗に媚びず、難に墮ちず、作者自ら淨土の信仰を摺み、一篇一篇悉く念佛の溫床に育成された宗教文學の最優なる創作。

▲限定出版 壹 千 部

▲定價 四圓五十錢・送料廿二錢

▲七八寸特製ノート型・天金・十二

ボ総振假名・約三百頁・美麗函入

▲放菴畫伯に依る……装幀、見返

し、六十四葉挿繪(數増版)

▲兩大家一致の想になる

豪華・絢麗版

一部を備へて

家寶とせられよ

法 然 上 人 鑽 仰 會
社 版 出 東 大
十ノ七地岡公芝京東
一七四九一京東發

陀

淨土十二月號 目次

表紙……………井上正春
扉・目次カット……………米倉隆從

食の倫理……………佐藤賢順(六)

世の父母に捧ぐ……………鈴木淨海(八)

矢持村の和尚……………増谷文雄(吳)

成都爆撃行の歌……………岩野喜久代(三)

寺院巡り 善導寺のいはれ……………東城生(五)

上人法然 和歌註解……………安西覺承(聖)

信仰相談……………中村辨康(哭)

殻を脱ぐ……………藤野滋(吾)



前線 誤つた思ひやり……………吉野翠幹（三）

實話 熊と念佛……………吉原自覺（四）

川柳 について……………西島〇丸（四）

歌壇……………與謝野晶子選（五）

俳壇……………太田耳動子選（五）

女性講壇 菩薩美への憧憬……………古屋登代子（六）

佛教理念の生活化……………中村辨康（六）

佛道の原則から見た念佛……………大野法道（七）

「浄土」娛樂室……………（七）

鑽仰會ニユース……………（五）

編輯後記……………（五）

浄土十二月號 目次

新發賣

一旦二球で健康量



合理的な新製品

肝油を精製した
純ビタミンAD
肝油が効くのはビ
タミンAとDの爲
だと判つてゐる今
日、魚油のまゝの肝油で我慢する必要はあ
りません。本品は肝油から精製抽出したビ
タミンAとDを無味無臭のグロビュール球
に収めた快適な製品——肝油の効果は完全
に数十倍に強化され且快適化されました。

新製品「研理ビタミン球」は、最近のビタミン學
説に據り、一旦二球づゝ服めば完全に生理的
健康量を満たせる様に、一球ビタミンA五千
D一千國際單位を含有させた製品。しかも
腎臓などの小球です。

一月量 六〇球 二圓

研理製品

研理ビタミン球

總代理店
株式會社
玉置商店
振替東京七二番

品切の際は總代理店へ

淨土

十二月號

念佛の行を信ぜぬ人にあ
ひて論じ、又あらぬ行の
人々にむかひて執論候
べからず。
法然上人御法語





世の父母に捧ぐ

少年の不良化防止に就て

鈴木 淨海

紙東亞建設の爲に我國の總力を擧げてその進行に邁進してゐる時、年々不良少年の統計的數字が漸増して行く事は、眞に見逃せない事實であります。聖戰既に四ヶ年、人的資源確保の上から見ても甚だ遺憾な事でもあります。私は此の際此處に紙上を通して子弟を持たれる世の父母に、私の少年保護司として過去十數年少年保護事業に微力を捧げて來ました経験より得た二、三の思ひつきを基礎として御參考迄に申し上げて見たいと存じます。

何故保護を要するか

何故に不良少年を保護せねばならぬかと云ふに、御承知の通り少年は國民の三分の一を占めて居り、然も國家の將來を双肩に擔ふもので、此の少年が一人でも不良化するか否かは國家の一大問題であり、殊に現下我が國に於きましては各方面に人的資源の確

保が叫ばれて居る際で、國力發展には特に重大なる關係を持つこの少年問題は、國家的見地からも決して等閑に附せられない事は贅言を要しません。就つて各家庭に於て若し一人の不良化した少年が出来たとすると、其の家庭の總ての人々の心痛は大變なものであり、又どの位家庭の内部を憂鬱にするかは想像に餘りあるものがあります。處が中には自分の家庭は教育も然も確かりして居るから少年の不良化の事には少しも關心を持たぬと言はれる所も無いではありませんが、然し少年は家庭のみでは生活して居る譯ではなく外部に出る機會もかなり多いので、其の機會に際し不良化した少年から害悪を加へられたり誘惑されたりする事は決して無いとは申されませぬ。

不良性と云ふものは傳染病の様なもので其の傳染性が非常に速く、被害者が往々にして、加害者に變る事があり、善良なる少年が不良化する事もかなり多いのであります。俗に言ふ「タカリ」

惡劣事件等は嘗て「タカラ」れた少年が遂に「タカル」と云ふ傾向を示して居ります。

そして世の父母が少年が不良になつた事に氣のつく時にはすでに手のつけられない様に悪くなつて居る事があります。結局不良化した少年を保護する事が、取りも直さず親良なる少年を保護する事で、一般社會を明朗ならしめ健全なる國民を作る所以である事を銘記して置きたいのであります。

東京少年觀境所に於て取扱ふ少年だけでも年々約一萬人の多きに及び、そして年々増加の傾向にあることは、非常に困つた問題であります。一人の不良少年には平均五人位の不良交友が居ると言ふ事は統計によりまして明かな事でもあります。此處で少年を保護指導する觀境所の説明をすれば宜しいのですが、紙上の都合後日に致し兼ね致しますが、最近では數觀境所の發達に伴ひ、少年工の不良化が一般に増加し、然も職員の者がかなり多いのは當局でも非常に憚んで居る次第であります。

然も時局は新體となり愈々重大を加へ、此の非常時局を乗り切るには一人の落伍も出さずに相繼へて青少年をして心身共に健全に生育せしめ、立派な日本國民になる迄育成する事が戦後國民に課せられた義務であります。國民共同の責任として保護指導し、而して戦後の戦りを完璧にする事が當然の義務であり、務めであります。

何故ならば少年は國の寶であり、吾が子も人の子も等しく陛下の大御寶として此の國土に生を享け、寧ろ日本國民たるの名誉と義務を有するものであります。されば互ひに相扶け、強く正しく導く事が取りも直さず、此の非常時局を乗り切り、純正な國民の大體に奉仕致す所以であります。

家庭の影響が最も大きい

世の父母は誰か、吾子の成功と出世を願はないものがありませう。寧ろ少年の未來は一步より進みますが、現在足下が暗く正しく生き得ざる者にして將來成功を望むものは木に依つて魚を獲むるより遙かに難しいことです。然るに親良なる少年が不良に陥ち入るに就いては種々の事情がありますが、要するに素養と環境とが最も重大なる役割を示して居ます。

昔の諺に「父賢にして子不肖なからず、母賢にして不肖なし」とある通り、少年の教養には又母の教養が重大な役割を演ずる事を忘れてはなりません。これは父の教育も大切であるが、更に母の家庭に於ける教育が確かりしてあれば、立派に成功出来得ると云ふ事の意味で、大抵の父親は常に家庭と離れて働き、母は家庭にあつて働く爲めに、少年に接する機會は父より遙かに多いのです。

聖徳太子様が「長者先づ行つて幼者これに倣ふ」と仰せられた通り、家庭を清く明るくし、少年の身の上にも何の不安もなく互に生き生かされる處に眞實の家庭が生ずる所以で、されば父母は常に少年の手本になるやう日常の行動に注意すると共に、其の一言一行にも細心の注意が肝要であります。私が先年名古屋少年審判所に勤めてゐた時のこと、取扱つた保護少年の家庭の宗教を尋ねて見ても（審判所では宗教調をする）名古屋の少年は非常に信仰心があり、保護少年の約八割位は自分の宗旨を知つております。これは此の地方が非常に敬神崇祖の念が深く、幼少の頃より常に父母の膝下にあつて神佛を拜む習慣を植へ付けられて居る關係と、他處には此の地方には昔から澤山の英雄や偉人が輩出した關係もありませうが、兎に角此の思想が幼少より植つけられ一々注意せんでも神佛の前には敬虔の心持を以て必ず頭を下げて拜む習慣があります。この點は自分は非常に感激しました。この拜む感謝すると云ふ事が幼少の頃より培ふ事が出来るとしたら、よりよい効果があると思ひます。

更に進んで一粒の汗、一滴の汁も起り難き處の集りである事を深く考へ、御馳走様と云ふ感謝の気持ちで育て嘔む事も必要ではないかと存じます。

次に家庭にあつて父母の不和は少年には想像の出来ない程影響が重大であります。これが爲めに一家を破壊に招く事も決して少

くはありません。少年は父に従ふべきか又母に従ふべきか迷ひ處には父母を輕視し反感を抱き、自暴自棄となり、その結果家出する様な例はかなり多いのです。十分注意を要する事と存じます。

父兄が注意すべきこと

次に少年に對しては此よりもその善事を養める機にする事も不良防止の一因となります。徳川家康公が徳川三百戦の基礎を假り太平を保ち得たと云ふ一面には、家康公は臣下に非行のあつた時は其の非行を責むる前に其の人の善行を褒めて後に非行を諷したと云ふ事であるが實に味ふべき事で、少年にくどい事は却つて子供が強情になり反感を懷き自暴自棄になる事は申す迄もありませぬ。打つ事は最も禁物です。勿論盲目的な溺愛は常に戒めねばなりませぬが、父の無理難な嚴格なる家庭に比較的少年の不良が多い事は特に注意すべき點であります。

更に少年に對しては特に金錢に對する注意が必要です。少年の犯罪経路と申しますと買喰が最初で七、八歳頃より始まり尋常四五年生の頃より喫煙、更に中學校三四年生頃よりミルクホールや喫茶店に入出入り、更に進んで麻雀や玉夾に、遂にはカフェー遊びや遊興等に進むもので、殊に遊興する様な少年は矯正はなかなか困難であります。結局これらは資金を得んが爲の手段として犯罪

を犯すものであります。されば家庭に於ては少年の年齢、家庭の生活程度を考慮して、過不足なき様適當に小遣銭を與へ、勉めて無駄を省き、貯蓄心を深める美風を養ふ様注意する事は申す迄もありません。

最近股職産業が非常に盛になり十七、八歳の少年工で月収七八十圓位の収入があり、家庭の監督を離れて放縱の生活を續け持ちつけぬ大金を手にして、遂に不良交友に誘惑せられカフエーの味を嗜へ、更に進んで花柳界に出入し、結局遊興費に窮し工場の手具類を持ち出し、中には一人で二十圓以上の品物を窃取したと云ふ事做も相當多あります。それに最近では首等を作つて搬送すると云ふ素質のものもかなり多く増加の傾向を示しておる事は特に注意を願ひたいものであります。

一人の不良は萬人を害す

夫は交友關係に就いて申し上げて見たいと思ひますが、今朱に交れば赤くなる」の諺の通り不良少年一人には五人の交友がある」と云ふ事は前に申し上げた通りで、御互に子を持つ父母として注意すべき事でありますが、この點は學生なれば常に學校と密接なる連絡をとる事も必要と認めます。

一昨秋東京裁判所に於て取扱ひました事件で、しかも時局の犯

罪として非常のセンセーションを引き起した事件がありました。

〇〇縣〇〇村で恰度農繁期になつても出征遺家族の家庭では糧食も出來ず非常に困つて居つたので村役場では相談の結果、土地の青年團(團員二十名中、少年が九名)に一任して、此の各々ある家族の仕事に奉仕する事になりました。

團長指揮の下に一同は感激しながら體身を措きまず働き、作業中は村の鐵守様に籠り自炊生活を致し非常に成功裡に終り、模範青年團として村長より褒状を受けたのは其の後間もない事でありました。そしてその年の秋の收穫期にも成功を遂げた事は申す迄ありません。

ところが最近には隨勞務仕に眞心をこめて働き表裏されたと云ふ模範青年團も此の中にたつた一人の不良が居つたばかりに既々と緊張味が缺けて來て怠け勝となり、村の畑から野菜物を盗み出し、さては夜中に兎や鶏等を盗み出し町に出ては賣り飛ばしてカフエー等に出入して遊興する様になり、遂には出征家族の家に七八回も住居侵入「夜這い」と云ふ大それた犯行を致す様になつたのであります。

此の少年の中には何事も知らず年長者に隨つて参り、戸外で番をなし、逃げ後れて捕へられ、前の小川に投げ込まれ、死生半生で這ひ上つて歸つたものや、老父の足を踏んだ爲めに捕へられ散々ひどい目に逢つたものもあります。右の様な次第で交友關係は

如何に大明であるか特に注意が必要と存じます。

更に少年の持物、讀み物、世に不明の點等は不慮の注意を拂ふ事が大切です。

不良を直すには愛が必要

昔仙臺和尚が雪の夜に十郎の下に坐禪して、遊里に遊ぶ弟子を待ちうけて自ら睡を踏み自分の教養の足らざることの責めを詫び、増長寺行説上人が盛衰のある弟子を破門せずに慈悲を以て救済し、眞人蔵にした様に、父母が眞實の眞心を以て之に導むならば如何に不良なる少年と雖も、必ずや改過遷善し立派な少年となる事が出来るものと信じます。此の點は子を持つ世の父母に、特に世の母に御馳ひ致したいと存じます。

母の愛の強さは無限でありまして、凡ての生きとし生ける物に遍満して居ります。燐野のきざす夜の響」と昔からの傳があります。先日夜所に寝て寝た妻で、洗ひ晒したはげ／＼の浴衣を着た年の頃四十五、六歳の母親が十七、八歳の少年を連れて、をろ／＼ながら「御馳ひに参りました」と大汗を流しながら、参ねて参りました。恰度私が保當番なので面會すると、次の様な物語をしました。(以下傳)

泣くに泣けない母の悲しみ

母親は澁川區〇〇町に住み、日雇ひを致して居るたみ子と申し、少年は良一とて當年十八歳で少年工として、同町の〇〇鋸工場の総監督工として通勤中と云ふ事です。良一を生み落し、四ヶ月程で父の良吉は風邪が因で子供を纏む／＼と云ひつゝ遂に三十一歳を一期として死亡しました。母は當時あまり無理をしたので體後が惡く血氣となり、歩く事も出来ず、如伊に弱氣な彼女も女一人の纏腕では如何する事も出来ず、途方に暮れて涙の日を送り續けました。恰度夫が左官職であつたのでその親方に良一を貰つて育てゝもらふ事になりました。

翌日左官屋の親方が着替を持つて約束の良一を引取りに來ました。十幾人かの子供を持つた鬼子母祇が一人の子を隠されて氣が狂つたと云ふ話があるが安らかに眠つて居る良一を見て、これが別れであるかと思つた母親は急に心が闇くなり凄惨な聲がむら／＼と湧いて急に嘔つきました。そして此の時から乞食をして必ず育てると決心しました。そして二十八才のうら若い女の纏腕で子供を抱いた彼女の生活の苦しみは想像以上でありました。他人は子嫌憎だとか馬鹿だと笑ひ、嫌に行けと勧めたり、子供をやれと忠告する者もありました。然し人々が色々に云つても

彼女に少しも手も觸けず一心に黙して働きぬきました。

處が恰度大正十二年九月一日のあの大地震の時に彼女の住んでゐた處は眞先に潰れて半時の後には火に包まれて仕舞ひ、彼女は一包みの衣類と良一を背負つたまふ被服廠に逃れたものの、被服廠も危いとの事で更に逃れたが、自分が氣のついた時には髪は半分焼けて、全身數ヶ所に火傷をおひ、ぼろの糊帶をされて良一と共に被服廠の〇〇救護所の世話になつて居ました。氣のついた母親は、鬼子母祇の守護を泣いて喜んだのも無理はありません。

其の後、彼女の女は二六時中出るに厭入つては寝、寝るには愛の扉風となつて暮し、其の苦心はなみ大抵ではありませんでした。貧乏すればする程父親と子供との情愛は離れて来るもので、随れば随る程親戚になるのは子に對する母の愛情でせう。あの大地震を機ひ浮べて吾が子を抱いて歸死して居た母親は幾人ともなく思ふに及ばぬが、子供を抱いた父親の屍は不葬にして一人も見出す事が出来ませんでした。女は弱しされど母は強し」と云ふ言葉があるが、眞に良一の母の如きを云ふのでせう。

然し此の母の限りなき愛、一方ならぬ苦勞は遂に水泡に歸し、我儘な良一少年には少しも感ぜられず、盲目の溺愛は却つて良一を不良に傾け、昨半夏頃より不良の學生が出たので、何處か母親は亡夫の位牌の前で泣き腫しました。母親は人知れず鬼子母祇に

祈願しました。母親は癡狂せんばかりに悲しみました。そして人の勧めで方廣參院にも相談し、醫藥塾にも願ひ出しました。その内に不良仲間が少年の家庭が甘い母親一人と見て、大びらに誘ひ出しに来る様になりました。遂には家の道具や母の衣類迄も持ち出して入贅する様になり、最近はお泊をするまでになりました。母親はたまり兼ね、遂に保護の相談に親戚所を尋ねて來た事がわかりました。事情を聞いた私は此の尊い母親に對して眞摯の同情を以て少年良一の身の上を引請けました。

父母恩重經と云ふ御經の中に左の様な句があります。其の初めで童みし遂は母の雛花の如くなりしに、子を養ふこと數年となれば容顏も憔悴す。水の如き雛の曉、水の如き雪の夜に乾ける處に子を遺し、涙はへる處に已れ限す。子は己の懷に居し、或は其の衣に尿すとも、手自ら洗ひ濯ぎて、臭穢を厭ふ事なし。食味を口に含みては之を其の子に嚼はさんに、苦き物は自ら嚙み、甘き物は吐きて與ふ。若し子遠く行くあらば歸りて其の面見るまでは出つ入りつ、之れを憶ひ、寝てもさめても之を憂ふ。己が生ある間は子の身に代らんとぞ念ひ、己れが死去せし後は子の身を護らんとぞ願ふ。云々」と。

以上振ない譯もない事を申し上げましたが、いさゝかなりとも世の父母に捧げ、以て御參考に資し得たとしたら幸甚と存じます。(筆者は東京審判所少年保護司)



成都爆撃行の歌

熱血の親鷲は詠ふ

岩野喜久代

赫々たる戦果 部隊長の友情

毎月、爆撃隊の歌を私は楽しみにして拜見してゐるが、その中に出征將士のお歌が目立つて優れてゐるのを、いつからか意識するやうになつた。平生より精神上にも肉體上にも一段昂揚した境地に在るところから生れた歌が、遊戲や常套の低いものでないことは當然であるが、なかには朗々誦して捨てがたいほど格調の高く意の深いものがある。私はそ

れ等の歌を集めて見たいと思つてゐたが、今回はからずも成都爆撃行の歌を送られて三嘆し、急に筆をとつて拙い解説を試みてみる氣になつた。

十月五日、ラヂオと各紙夕刊は、その前日四日に四川省大平寺飛行場をわが海軍航空部隊が奇襲して、敵三十一機を血祭りにあげ、更に敵飛行場へ着陸して重要建物を焼却して引上げた沈着果敢ぶりを擧つて賞揚し、更にその殊勲に對して、海軍大官と海軍軍令部次長の名を以て祝電の發せられたことを傳へてゐる。

この勇猛電撃の部隊長が、他戦に優にやさしい風流人であることを知るものはい。現役の重要な地位にある人だから、本名はしばらく措くが、雅號を柏町と稱し、詩を賦し歌を作ること、私とは厚知の間柄である。柏町部隊長は、四日成都空襲に際し更に一つの逸事を傳へてゐる。それは昨年十一月四日の成都空襲に、悲壯な自爆を遂げた前任者故奥田少將の英靈を弔はんがため、奥田未亡人の送つた遺書を成都上空から散華して、ねんごろに供養したことである。この美しい友情は瀾しい眼ひの場にあつて、どの位人の心を泣かせたことであらうか。成都爆撃の歌はこの日に作られ、翌五日飛行隊で内地に送られたものである。三十首あまりのもので、いづれも佳作であるが、紙

面^{めん}の都合^{ごうご}で、全部^{ぜんぶ}を紹介^{しょうかい}したいから、代表^{だいひょう}候^{こう}を次に解説^{かいせつ}することにする。

三峽も數ならず

堂々^{だうだう}空^{そら}を覆^{おほ}ふ羽撃^{はたき}

秋^{あき}の朝成^{あさなり}都^{みやこ}に向^{むか}ふ若者^{わかしよ}に授^{さづ}けし任務^{にんむ}難^{かた}くもあるかな

出動^{しゅつどう}部隊^{ぶたい}は進發^{しんぱつ}に際^きして、斃^は死^しして上官^{じやうかん}の訓示^{くんし}を受ける。いづれも生還^{せいざん}を期^{もち}するものなく、再見^{さいけん}を豫想^{よざう}しがたいから、上下^{じやうげ}の階士^{かいし}の交す隘^{がい}と隘^{がい}は、無量^{むりやう}の感^{かん}を包^{つつ}んで、驚^{おどろ}きつくやうに相交^{さうかう}されるものだといひてゐる。そして授ける命令^{めいれい}は、いつも非常に困難^{くわんなん}なものばかりである。上官^{じやうかん}は若者^{わかしよ}を惜^{おし}しみいたはりつゝも、この困難^{くわんなん}な大役^{だいやく}を、國家^{こくが}の爲^{ため}めに授けずには居^ゐられない。全ての私情^{しじやう}を滅^{めつ}し、ただ公^{こう}に奉^{ほう}する大精神^{だいせいしん}のみが、受^うくる者^{もの}、授ける者に躍動^{えつどう}してゐるのである。

山川^{さんせん}の迂餘^{うよ}曲折^{きよくせつ}にかかはらず眞^ま一文^{いちぶん}字^じに飛^とぶ快^{かい}さ

眼下^{がんげ}には揚子江^{やうしきやう}の大^{おほ}いなる流れが蜿蜒^{えんえん}としてつづき、重疊^{じゆうたふ}たる四川^{しせん}の山^{やま}がはてもなく通つてゐる。地上^{ちじやう}部隊^{ぶたい}ならそれを越^こゆるだけでも容易^{ゆうい}な勞苦^{らうこ}ではない。併^ひし機上^{きじやう}にある身^みは、それらの地勢^{ちせい}にかゝはらず眞^ま一文^{いちぶん}字^じに目的地^{もく的地}へ飛^とび越^こえて行くことが出来る。

三峽^{さんせつ}も劍閣^{けんかく}の險^{けん}も數^{かず}ならずわが編隊^{へんたい}は空^{そら}よりぞ行く

有谷^{ありや}な三峽^{さんせつ}の峻^{げん}、小^こさな汽船^{きせん}などは概^{おほ}流^{りゅう}されてしまふと云^いふ程^{ほど}水勢^{すいせい}が激^{げき}しく、戰艦^{せんかん}は四川^{しせん}名物^{めいぶつ}の曳子^{えし}數百^{すうひやく}名^なが竹索^{ちくさく}で、船^{ふね}を上流^{じやうりゅう}にひき上げると云^いふ所^{ところ}も、はるか下^{した}の方にバノラマのやうに眺^{なが}めて、わが編隊^{へんたい}は堂々^{だうだう}と空^{そら}から四川^{しせん}省^{しやう}に進攻^{しんこう}すると云^いふのである。

天心^{てんしん}は紺青^{こんせい}に澄^すみ中空^{ちゆうくう}は綠^ろに掲^あせて

その下^{した}は雲^{うみ}

歌^{うた}の通りで説明^{せつめい}を要^よしないと思^{おも}ふが、晴^はれた秋^{あき}の蜀^{しやく}の上空^{じやうくう}の美^うしさが思^{おも}ひやられるのである。

中空^{ちゆうくう}にただよふ雲^{うみ}の隙間^{きま}より蜀^{しやく}の山^{やま}見^みゆ蜀^{しやく}の家^{いへ}見^みゆ

機^きはめざす四川^{しせん}省^{しやう}に入^いつた。雲^{うみ}の閉^ふざした隙間^{きま}から下^{した}を覗^{のぞ}ふと、まさしく見^みゆるものは蜀^{しやく}の山^{やま}、蜀^{しやく}の家^{いへ}々々^{々々}である。

蜀^{しやく}の山^{やま}頂^{てい}きまでも耕^かせり大人^{おとな}知^しらず國^{くに}大^{だい}にして

この歌^{うた}には註^{しゆ}がある。(李鴻章^{りこうしやう}嘗^{かつ}て我^{われ}中國^{ちゆうごく}邊^{へん}の山^{やま}の耕^かされたるを見て國^{くに}力^{りき}の衰^{おとろ}しきを嘆^{なげ}ふと云^いふ)併^ひし李鴻章^{りこうしやう}よ、お前は自^{みづか}分の國^{くに}がそんなに廣大^{くわんだい}なのを誇^こつたが、今^{いま}見る四川^{しせん}省^{しやう}の山^{やま}々が山頂^{さんてい}まで耕^かされてゐるのを知^しらなかつたのか。

雲の去來する天地 突如火をふく爆撃

雲の峰湧き立つさまのをかしきに送られ征けば空路も樂し

重疊たる山嶽を越えるのであるから、高度も餘程高く取るものであるらしい。戰さに征く道中ではあるが、空暗れて白雲があたりこちにもくもくと湧き立つてゐる中を飛ぶのは一寸たのしい心地がすると云つて、餘裕綽々のところを示した心憎い歌である。

わが部下の一機この春自爆せし梁山
悲しその上を行く

昨年五月三十日わが部下は今眼下に見える梁山で自爆した。本日その眞上を通過し、哀愴の情を再び新たに悲痛に堪へない。

白雲に張力あらばその上に寝ころぶ
すべもあらんとぞ思ふ

見渡す限りみなざりわたる雲の海を眺めて、ふと雲の上に寝てみたいと思ふ心を詠んだものである。

戰の場とは見えす蜀の秋雲と山との
繪巻物これ

これが阿修羅の狂ふ戰場であらうか。山は太古の驛けさにそびえ、雲はしづかに去來して、蜀の秋の天地の美しさ限りなし、併し我が編隊はやがて爆撃の響に移るのである。

零十度越えしとおぼし機中皆既に凍
てつく爆撃のとき

いざ爆撃に移らうとして、準備をする時、高く雲上飛行をして來たので、気温は零下十度をも越えたらしい。機中のものは殆んど凍りついてしまつて、將兵の勞苦も一入であ

る。

お守りをいいただき拜む兵もあり持場を固め爆撃に移る

(我々の打つ彈丸は一億國民の魂なるぞ心して行け)と歌つた兵士もある位で、わが將兵の攻撃に移るや、一發の彈丸と云へども、むなしくはせぬ。おしいただかんばかりに敬虔な心持ちで用ひてゐるのである。機上から爆撃する時も將兵は、むだ彈を極度に恐れつつしみ、この歌にあるやうに、どうぞ目的に命中させて下さいと祈願をこめてから、發射する兵士もあるのである。お守りをいただき拜む兵もあるを消極的に解しては不可ない。非常に積極的な意圖をもつて、人事の到れる限りをつくして、更に天祐の加護を祈る赤誠のあらはれと解すべきである。

地上掃射わが戰闘機花を撒き成都の空を美しくする

地上すれすれにまで低空飛行を敢行して、機關銃掃射をして、敵の心魂を寒からしめてゐるのは、わが戦闘機部隊である。その機銃の火が花のやうに燃えて、成都の空を美しく色どつてゐる。

英靈に散華して 全機歸還の歡び

今日去年來月のこと英靈を弔はんと
て我れも散華す

今日去年來月は、昭和十四年十一月四日のこと、月と年こそかはれ、まさしく四日は前任者奥田少將が、成都太平寺飛行場に於て自爆した命日である。この命日には、弔合戦の意氣を以て、部隊をひきゐて、空襲を敢行したが、更に奥田少將の英靈を慰めんため、空中より薔の花を爆弾に代へて一同で撒いたと云ふのである。

わが友はここに自爆す太平寺俯し拜
みつ散華するかな
格調の高い友情に溢れた名詩である。拙い解説を要しない、朗朗と唱讀していただきたい。

この散華銃後の人の供養として我れに
持たせておこせし司令官

今日奥田少將英靈のため成都上空から撒いた散華は自分の思ひつきではない。銃後にある故人の未亡人が供養にと差出したものを、慥に嗚い司令官のはからひで、自分にさうして呉れと送つて來たものである。未亡人の心持ちと、司令官の温情と、柏野大佐の友情とがこの一首には溢れてゐる。

白雲の帳の上を順風に乗り勢揃ひし
て歸るうれしさ

(歸路はいつも順風全機歸還す)

弔合戦は非常な大成功を収めて、しかもわが一機の缺けたものもなく、全機無事歸路についた。
風さへ順風で正にえ手に帆あげた得意の歸還である。

この日友隊の戦闘機隊同じく長驅成都過、地上掃射及敵飛行場に着陸俣を樹つ、其の歸還報告の時、夕日春き特に美觀なり、その内わが育てし少年航空兵ありたれば、

大陸の入り日照り映ゆ汝が樹てしけふの驍と光り何れぞ

作者の註を讀むと、作者が育てた少年航空兵の敵中着陸の大膽な敵の偉勳を、非常に喜ばれ、わがことのやうに勵湧かせて居られる熱情が傳はれる。かかる優しくも強い親愛に育くまれて、わが海軍航空隊の光りは益々發輝されるのである。

食しょくの倫りん理り

佐藤賢順

時代の必然は、日常生活の種々の方面で、確しい見方、考へ方、暮らし方、つまり今までのとは違つた倫理を必要とするやうになる。昨日の倫理を捨て、明日への倫理を創造するのである。倫理とても生きてゐる人間の道であるから、脱皮もすれば成長もする、それに一瞬不思議はない。今は丁度その時で、生活百戦についての考へ方が更新されねばならぬ時機に到つてゐる。

然し更新されてみれば、大方はかうなるのが當り前であつたと考へられるものとか、かうなればよいと願つてゐても、色々な情性や無智や慣習のために、なかなか實現されなかつたのが、實現されるやうになつたものとかで、形勢特に確しいといふものもないやうである。生活といふものは、一度擲げたり安易にしたりすると、外から力が加はるのでない限り、再びそれを元へ還へすことは容易でない。必要以上のものま

でが、意識とか前例とかになつて、多くは眞の意義が失はれて、外側に殼としてこびりついてくる。その意味での所謂無駄が、廢除されるやうになつたのである。

であるから、實は新しいといふよりは、寧ろ本質的な、眞の生活へ還つたといふ方が一層適切で、所謂眞意識の倫理も多分にさういふ精神的な、宗教的でさへある傾向を持つてゐる。華僑への自動車の立入り禁止とか、五圓以上の料理の禁止とかを、農村の人々が新聞で讀んだら、今ごろこんなことが問題になつてゐるのかと、恐らく不思議な氣持を抱くのではないかと思ふ。

今日の生活倫理のもう一つの傾向は、多分に復古的であるといふことだ。われ／＼の幾世代前かの曾ての生活觀が復興されてゐるといふことだ。精神的な生活觀は、過去に遡つて幾世代前からの先人が歩んだ道に、先蹤を求め規範を求め





るより外に致し方がないために、今日の倫理更生は自から復古的な傾向を帯びてくるのである。

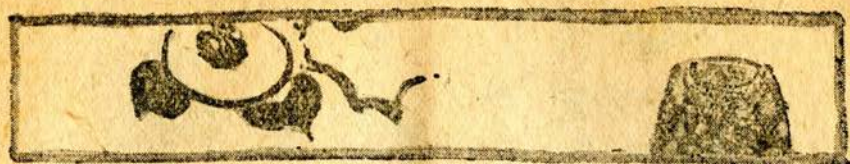
これらの事情から、新しい倫理は相當に禁慾的な性格を持たねばならぬが、そしてその意味で宗教的でさへあるとも言はれるのであるが、禁慾的と思はれるのも、從來の生活觀が餘りに享樂肯定的であつた慣習から、暫くは身に應へるといふまで、適當の時日が経過して更生された生活に慣れてしまへば、それが當然であることに氣付くであらうし、結局その方がよかつたことを味はふのであらう。全體主義倫理の特色は、個人の慾望の放恣なる開放を禁壓し否定して、共同の悅樂を目標とするのであるから、その意味で個人にとつては嚴重な禁慾生活を要求するの當然なのである。

かういふことは生活の諸方面に亘つて言へることであるが、こゝでは生活の中でも最も基礎的な事柄である食ふことの倫理、食物を中心としての生活觀だけを語らう。こゝで倫理などいふ言葉を使へば大學堂に聞えるけれども、食ふことはそれだけが單獨に意味があるわけではなく、生活の全體の組織の中へ嵌込んで考へられなければならないものであるから食の倫理といつても奇異ではない筈である。

我が國では、大ざつばな言ひ方であるが、古來より物に對

して二種の考へ方がなされてゐる。一つは物を輕んじて心を重んずる考へ方で、人間は物によつて左右されないといふ思想である。食へ物についても、餘りこれに捉はれることは一種の恥辱と考へることが多く、腹が空いても平氣な顔をしてことを憂にも出さないのが良いとされた「武士は食はねど高擡子」である。「花より團子」といふ俚諺もあるが、却つてそれは逆に、花を賞づる風雅な趣味を言ひ現はしてゐる場合の方が多し。

も一つの考へ方は、物を單に物と見ず、これに心を投ぜしめて見る見方で、物よりも心を重んずる精神主義が、このやうな生活觀を導くのであるが、物は慧みとして、たゞの一人の人以上の、多數の人のお蔭や、或はもつと廣い意味での、自然とか天地とかのお蔭によつて興へられた恩恵として頂くのである。それはお蔭とか冥利とかいふ言葉が示してゐる通り、物を單なる物と見るのでなく、或る生きたまもの、影か目に見えぬ力として眞き、一種の精神的な働きとして受けるのである。食へ物とても一人々々の力で作つたものは一つもない、いづれも天地自然の一切の因縁によつて結ばれた物で、施物であり恩物である。西洋の機械的な自然觀、物質觀が、自然を征服しこれを人間の幸福や快樂のために利用するのを目的としてゐるのに對して（これも今の場合、大ざつばな比較を



するより以上の餘裕がないが、我が國のそれは、自然に親和しそれと一如にならうとするところに特色があると言へる。富士山とか木曾御嶽とか立山とかいふ高山に登るにしても、それは踏破でも征服でもなく、山の靈に参詣するためであり登山そのものが一つの敬虔なる修業になつてゐるので、決して遊山気分や征服慾からではない。このやうな自然に對する態度の根本的な異りは、食べ物に對しても明らかに反映されてゐる。

西洋の食事は、食欲やその他の慾望を思ふまゝに満足させるので、西洋風の宴會ではまぶしい程のシャンデリアの光の下で、賑やかに奏でられる音楽を聞きながら、互に遠慮なく談笑しながら食事をする。これは狩獵に行つて取つた獲物を山野ですぐさま火を焚き料理して舌鼓みを打ち食べ合ひ踊り合つた遺風ではないか。また、部族と部族とが戦つて勝つた方が、そのまゝ戦場で勝利を祝ふために火を焚き笛を鳴らし鼓を打つて、舞ひ狂つた酒宴の遺風ではないか。私どもは子供の時は「御飯を食べながら喋つてはいけない」と訓されたものだが、後になつてからは「御飯は一家揃つて愉快に談笑しながら食べるものだ」と聞いた。後の方は明かに西洋風の食事の行儀が移入されてからのことで、明治以來、食べ物に關する觀念が相當に變つてから教養を受けた人々に聞かされ

たことであらう。

東京では食事については決して享樂的な氣分を持たないやうに教へてきた。食べ物を惡みとして、施物として頂くのは自然と親しみ易い我が國の民族性と、佛教の緣起論とが結びついて長い間に段々と生長した慕し方で、たゞそれだけを取つてみても、過去に於いて、佛教の生活指導力が如何に大きかつたかを想像できる。我が國では、食べ物は、自分が働いて儲けた金で、勝手に自分が食べたいものを買つてきて、自分が自由に食べるのだ、といふ嬌慢はなかつた。一粒の米も粒々辛苦として受取るのであり「頂きます」である。食事に對するかやうな信念は、生活全般に豊かなる滋味を興へて、社會、自然に對する報恩、感謝の念、従つてそれに伴ふ奉仕奉公の行へと導くのである。

物を施物として受取ることは、物を無駄にしないことであり、粗末にすれば「稟利が悪い」ことになり「罰が當つて目がつぶれる」ことになる。佛の御心に背くことになる。この考を我が國の自然觀と密接に結びつけて「お天道様の罰が當る」といふやうに表現したこともある。

數年前の三月の初旬、京都へ行つた序に、同行の辻重光君といつしよに、黄栗山へ参詣して、白雲庵で普茶料理を食べ



たことがあつた。雨上りの庭に今を盛りの紅梅が美しかつた。こゝの料理は、餽素とか枯淡とかいふ味は別として、凡そ料理の範疇には入れることのでき難いもので、料理といふよりは一種の教誡である。その中に「雲片」といふ料理があつた。それは大根や人参など蔬菜の切屑さへも、厨物である故に捨てずに、薬にしたもので、雲片とは「斷雲片々」の洒落なのである。關東ではケンチン汁といふ大根や人参やごぼろなどを細く刻んで入れた汁がある。あれも元はわざわざ刻むのではなく、野菜の切屑の捨てるべきを捨てずに油揚げなどを入れて汁にしたので、建長寺の典座で行つたのが始まりで、建長寺汁の轉訛であるといふ。それと好一對である。いづれにも物と食とに對して床しい心盡しが察せられて、法悦の潤ひをさへ伺へるではないか。

食に對する敬虔な態度と嚴格な規律の一つの例は禪堂の食事であらう。去る一月中旬の建長寺の半圓大接心に参加した時の経験であるが、時間になつて、析木が鳴ると、禪堂で坐つてゐる雲水達は靜かに立上つて後の棚に載せてある食器（持鉢）を取つて、恭しく兩手で捧げるやうにして一列に並ぶ。鉢が先導となつて靜々と食堂に入つて、卓を中にして向き合つて坐る。一々析木の合圖で事を運ぶので口をきくことは一切許されない。布巾に包んであるまゝ自分の前に置き布巾

を解く。食器といつても櫛が大小二つ、皿代りに使へる櫛の蓋が一つ。それを重ねて小さい布巾で包んで箸を挿してあるこれが食器の凡てである。朝ならば施粥、晝ならば施粥、晝を唱へ、般若心經を誦し、五觀を讀む。凡て食前に誦する偈文は、この食を受けるに備するや否やを反省し、厭を斷じ善を修せんが爲めに、また肉慾を俵ち諸々の人々と共に佛道を成ぜんが爲に、この食を受けるのであると一々食を取る意義を省察する。それから漸く箸をとるといふことになる。食事が終れば櫛は自分で洗つてその洗つた湯まで飲みほして、元の通りに包んで食器棚を唱へ、入つてきた時のやうに靜かに禪堂に歸るのである。食事の前の食作法、或は齋食儀は何も禪堂に限つたことではなく、とうに平安佛教で秩序正しく行はれたもので、多少の相違があるだけで今も佛教共通の作法である。

受食五觀に似た意味の短い句を食前に唱へることは、食を通じて生活全體に生き生きとした波動を興へて、謝儀の信念と釋公の實踐とへ導くに違ひない。新生活運動は經濟的、政治的、理解の上に築かれねばならぬこと勿論であるが、生活としてこれに倫理が伴はなければならぬ。倫理を盛るとすれば、復古的に我が國民性の温床に成育したものに依據し、この線に沿ふてゆくより他に道はない。



お手紙有難う御座いました。丁度〇〇戦に参加のために出陣準備で忙殺されてゐる時に、お手紙を入手しましたので、行軍途中の馬の上で繰り返しく拝見いたしました。何時もながらの御厚情と御親切な御注意の數々には、まさに戰陣開始直前で緊張し切つてゐ

前線
便り

誤つた思ひやり

前線・銃後の心の連り
手紙をドシ送りませう

たことゝて尙更らること、その一つ一つが身にしみて感ぜられました。

戰陣は戰陣に進み、敗敵を追つて只今やうやく新占領地〇〇に宿營いたすことになりま

した。すつかり清掃した自分の寢臺に(トハ云つても土間に藁を並べたものですが)久し

振りに胡坐をかいてみると、急に貴兄のお手紙が上衣の左物入れに藏つてあることが思ひ

出されて、いま一度讀み返してゐるうちに懐しさがこみあげて來ました。取り敢へず返事

を書くことにしました。一苦勞してからこうして新しい宿舎に落ちついた氣持は、恐らく

經驗せねば判らぬ嬉しさだと思ひます。勝利

の歡喜とでも云ひませうか、今私達は昨日ま

での苦勞をまるで忘れてしまつたやうに——

いや實は苦勞が大きかつただけに今日の喜びも大きいのでせうが——疲れを知らぬやうな

體をして皆せつせと働いてゐます。貴兄の手紙を掌に載せて眺めてゐると、この返事が書けるとは今の今まで考へてゐなかつたことに氣がつきました。これで又次の作戦にはお役に立つのだといふ誇らしげな氣持になつて、誰もゐない部屋の中で獨り胸を張つてみました。

お手紙に「ると内地でも色々」と變つて來た由で、お骨折下さつてゐる點は私達何時も有

りやひ思たつ誤

難いと思つてゐます。ただ内地が、いや東京が何んなになつたか、貴兄に説明されてもピンと来ないものがあります。東京のこと家のことを忘れ切つたわけではありませんが、一つのことを思ひ出すには一寸考へなければ浮んで来ないものがあります。誰も知らない私の子供がもう四歳になつたのですから無理もあります。この間敵を追ひ／＼して遂にここまで来ましたが、まだ／＼私達のなさねばならぬことの前途は遠いものがあります。實際戦ひは未だこれからであるといふこと、支那の廣さとはこれ亦内地では誤解し難い實感だと思ひます。私達は敵を壓倒殲滅するのが任務ですから、そのために多少なりともお役に立てば本望です。東京のことを考へたり家のことを案じたりする要はありません。私達は敵が参るまでこゝを離れられるわけがありません。

しかし私達は、内地の人々が何うあつてもよいとは考へません。いやそれよりも所謂統後の力といふものが、私達前線に密接不離な

關係にあつて、その影響が實に大きいと申さねばなりません。幸ひ私達の受け取る便りは



全部が全部とも家のことは心配いらぬこと、内地の人々は皆心を一つにし力を合せて奮闘

してゐること、新賊に報せられるやうな不心得の者は極く一部の者に過ぎず實際には見當

らぬこと等々であります。従つて私達の遠事は皆同じやうに「ますます元氣一杯で軍務に精勵してゐる」ことだけで、他に記すべき事柄がないわけです。

地圖上の距離でこそ東京とこゝ現地とは遠く離れてゐますが、同じ目的に向つて邁進してゐる私達でありますから、内地からの便りが直接私達に影響することは當然でありませう。實際皆々様の御激勵の便りが如何程私達を力つけて來たか、餘り考へたこともありませんが、莫大なものだつたと信じます。

ここで一つ貴下に注文することがあります。それは私達家族の中に不幸のあつた場合、そのことを私達にかくして知らせぬことがあるやうですが、これは

絶縁に止めて欲しいことです。勿論家人が風邪を引いたとか、一寸入院したとかの一時の禍ひであれば、わざわざ私達に知らせる必要もありますまい。それにこちらで手紙を取つた時には、すでに歸つてゐることもありませうし、この程度なら少しばかり元氣が減つた程度でせうから問題にもなりません。但し家人の死逝した時は全然別です。この場合にはなるべく早く知らせて欲しいと思ひます。皆様が考へてゐるやうに、家人の死逝を知つて落膽するやうな者は當地には一人もいません。長い間外地にゐるのでから、家の方に變化のあるのが當然で、ないのが不思議な位です。成程家人の死逝に對しては氣の毒に思ひ故人を弔らふ氣持は十分にありますが、そのために任務に障るやうな者は斷じて一人もありません。

それが反對に家人の不幸を知らなかつたとしたら、それこそ氣を落します。私達は平常明日の生命さもあるものとは思つてゐません。若し私達が家人等の不幸を知らぬまゝに

戰死したとしたら何うするつもりか、この取柄かへしのつかぬ失態に對して知らせを怠つた者は誰れにお詫びをするつもりなのか、それとも私達には通知することもないと考へてゐるのか等、と云つて憤慨します。

このことについての好實例を二つ擧げて、内地の人々の間違ひを指摘したいと思ひます。或る時私は某戰友の友人といふ人から彼の妻君の弔報を受け取りました。それによれば、實はその妻君が一年半ばかり前に心臓病のため藥石効なく他界したのであるが、一周忌も済んだので、或ひは知らせてもよいと思ふから適當な時機に本人に知せてくれといふのです。私はすぐその場に彼を呼んで妻君の他界された旨知らせました。

ところが彼は自分の妻君が、その時まで無事に暮してゐたと信じてゐたわけで、時折手紙をやり、家のことについての注意もしてやつてゐたわけです。すると彼の手紙に對してちやんと毎回返事があつたのです。勿論筆跡が違ふので筆名ことは判つてゐました。しかしその妻君は以前から心臓が悪いので、或ひは床についてゐて書けぬのだらうと考へてゐたわけです。

それが「實は妻君は他界してゐた」といふことを一年半も過ぎて初めて知つたのでは、一體彼の氣持の中に湧きあがるものを何處に持つて行つたらよいのでせうか。今まで信じ切つてゐた氣持を見事に裏切られて、誰に向つて怒つたらよいのでせうか。彼の氣持は淋しいとか、可憐とかいふものではありません。これ程彼にとつての大切な問題を知らせてくれなかつたこと、まんまと偽られてゐても文句の云えないこと、自分勝手すぎる内地の人々の氣持に打ちのめされた形でした。彼は私の前で口惜しさの餘り黙つて立つてゐました。それでも彼はその後の任務に障るやうなこともなく、努めて平氣な顔をしてゐました。しかし餘りと云へば家人友人の情ない處置の口惜しさに、當分は元氣の出ないのも仕方のないことでした。

又他の一つの例は、〇〇のため内地に歸還

した戦友のことですが、或る時私は彼の友人と稱する人から長文の手紙を受取りました。

その手紙によると、彼が内地歸還後すっかり元氣が失せて別人になつてしまひ、彼の動作に妙な所があつて不思議に思ふが、如何にしたらよいか舊

戦友の私に智慧を貸してくれといふのです。それなら何是

變つてしまつたか、その友人には原因が判らぬとしてあ

りましたが、私は別の所からの手紙で彼の變つた原因を知つてゐたのです。

彼は明朗な兵士で、分隊の誰れからも好かれてゐました。又彼は

身體が剛健で何をするにも率先ことに當り、分隊の人氣

ものでもあつたのです。彼には妻との間に一人の女の子があつて、よく寫眞を

出して「この所がおやちに似てゐるだらう」等と云つて自慢してゐたもので、若し生命があつて歸れたら子供と一緒に暮すのだと戦友仲間での子煩悩者であつたのです。その彼が歸還することとなり、私達と分

る長い旅程を毎日々々内地に向つて行軍してゐる間、私達は彼が初めて愛兒と會ふ時は何

う」等と云つて自慢してゐたもので、若し生命があつて歸れたら子供と一緒に暮すのだと戦友仲間での子煩悩者であつたのです。その彼が歸還することとなり、私達と分



んなであらうと話し合つてゐました。それから餘程経つて私達は、あれ程までに可愛がつてゐた女の兒がその時すでにこの世にはゐなかつたことを知りました。しかし彼は除隊するまで愛兒の死を知らなかつたのです。

内地に歸つてからの彼は、見違へる程成長したであらう愛兒を心に描いて、そのことばかり考へてゐたでせう。それが除隊して家に歸つて初めて愛兒の死んでゐたこと、しかも半年以上も前に他界してゐたことを知らされては、明朗だつただけ彼の衝撃は大きかつたに相違ありません。私達は彼の狂つた原因はこの愛兒の死を知らなかつたためだと思つてゐます。そして私達今でも彼の家人や友人達に限りない憤りを感じてゐます。

これ等の話と反響だつた場合の實例も澤山ありますが、申すまでもないことだと考へます。陽が充分曇りました。刻々に變化する五色の雲は大陸ならではと思はれる華麗さです。今夜は月があるのできつと警戒が樂でせう。

(吉野翠軒)

◆ …… 著・名・寺・院・巡・り …… ◆

大檀林 筑後

善導寺のいはれ

東 城 生

開山は二祖鎮西上人

宗祖法然上人の法燈を繼いで、確固たる淨土宗の基礎の第一歩を築いた方は申すまでもなく二祖鎮西上人である。そして筑後の善導寺は、鎮西上人のお開きになつた寺で、上人がこゝで廣く淨土宗をお擧めになつたところとしてこの寺は有名で、今尚春夏秋冬參詣する人が多い。

善導寺は嚴岡縣三井郡善導寺村にある。久遠「善導寺驛」で下車し、北方約八丁ゆくと、そこには二萬餘坪の境内地があつて、古松老楓が生茂り、鑑のやうな紅葉の間を縫つて建坪一千餘に及ぶ七堂伽藍が疊を並べ、一歩足を踏み入れると自ら莊嚴の氣がみなぎり誰でも思はず合掌せずにはゐられない氣がする。

今から凡そ七百四十餘年前のこと、建久二年の秋鎮西上人が草野の庄を遊行せられてゐ

ると、北方にあつた大河の邊に曠野に續く森林があり、そのあたりに紫雲がたなびき、光明の輝いてゐるのをこゝろになつて、「これこそ佛法有縁の地なり」とお考へになり、精舎建立の志を起されたと云はれてゐる。當時筑後の總司に草野入道要阿といふ人があつて、その要作阿とともに深く鎮西上人に歸依してゐたところから、寺地を寄進して三十六坊を建て、水田を施入する等して、この寺の基礎を築いた。その時には境内だけで東西七町、南北五町もあり、境外は東は飯田馬場通から西は興田村に至る凡そ八町もあり、南は築面山麓から北は筑後川に亘つて凡そ二十三町が寺域に屬し、水田百二十五町を領してゐたと云はれてゐる。

善導大師のお迎えで

鎮西上人が五十一歳の折、即ち建暦三年三月十三日のこと般舟道場一夜夢の中に一人の高僧が現れて、

「汝、如法に念佛を修行するが故に、我は来りて證明す。」

我は之れ唐の善導なり、早く我を博多の津に迎へに來れ。」

と申されたので、上人は早速にその發願博多の津に行かれた。そしてその松原で一人の僧に出遇つたが、別に氣にもとめず更に進んで海岸に出て、丁度碇泊中の船があつたので、その船長妙典に尋ねられた。すると船長妙典の云ふには「私達が支那の國を出航しようとした時に、一人の和尚さまが來て是非その船に乗せて行けと御所望なされましたので、お乗せ申して來ました。その和尚さまはたつた今船を降りて松原の方に行かれました。」といふことであつた。



そこで上人は大いに驚き、その和尚さまは必ずや善導大師の御化身に相違ない、自分が松原で出逢つた方がそれであると考へて、直ぐ引き返して松原を尋ねられたけれど、最早人跡一つ見出せないのので、上人は「彼の僧はすでに何處かに去られたのだらうか、それにしても足が早過ぎるが……」と思ひながら、尙周圍を見廻してゐると、一本の松の樹の下に善導大師の形像がたつた一躰腰打かけて合掌してましますのを發見した。上人は大いに驚くと同時に大いに喜ばれ、恭敬禮拜した後、これを負うて筑後に歸り、寺内に影堂を建てゝ安置した。この御木像が今尙參詣者の絶えぬ善導大師像（國寶）である。

「船板の御名號」の奇瑞

この事があつて間もなく、かの船長妙典が上人のところを訪れて云ふには、「私達が支那の國を發つてから、海上半路はど來ました際に惡風俄かに起つて、狂瀾怒濤に船が弄

ばれ、船徒達は生きた心地なく戦々然としてゐました。するとあの支那からお乗せした和尚さまが、徐ろに起つて海面に、南無阿彌陀佛と文字をお書きになり、皆の者に勸めて南無阿彌陀佛を稱へよと申されました。一同は皆必死になつて聲高にお念佛を稱へました。すると不思議にも颶風忽ち止み洪濤静まり、そして波の上には文字が鮮かに現れました。その字の形が船板にうつて留まりました。」と説明し、更に語をついで云ふには、「實は昨夜のことでした。夢の中に善導大師さまが現はれて、彼の船板を我が影堂に納め置き、末代の利生に備えよと仰せられましたので、今日その船板を奉經いたしたく持つて参りました。」とのことでした。これが所謂「船板の御名號」と稱して同寺に所藏せられ、これを楷寫にしたものが海上生活者のお守りとなつてゐる。

火厄の多い寺の略歴

次に善導寺の寺歴を略記すれば、先づ建保五年三月に勅額を賜ふた。更に後醍醐天皇の御時には勅願所となり、元徳二年四月には「日域淨土最初樹利」及び「祈禱」の二額を賜ふた。斯く寺運はいよく隆盛になつたが、延元三年兵火に罹つて堂宇の全部が焼失したのを初めとして、その後何回となく火厄に逢つてゐる。

博多善導寺は、應仁年中に兵火のため焼失したため第十一世應譽願山が文明十二年に亂を避けて博多に至り、一時隱栖したところである。大永十二年には筑前立花城主戸次道雪が兵を率ひて善導寺堂舎を焼却したので、第十九世大譽祖吟以下四十九名が害せられ、善導大師並に開山像は寺僧の手により危く難を避れたことさへあつた。そしてこの二像を一時田圃に隱匿した。その地を念佛田と稱し暫くそこに安置したのであつた。次いで大永十六年には同寺を再興して開山三百五十年忌を修したが、慶長五年になつて黒田孝高が來襲してまた該堂を破壊してしまつた。しかし

間もなく山門、大龍院、釋迦堂、鐘樓等を再興することが出来た。

元和九年三月には畏れ多くも後水尾天皇より紫衣の綸旨を賜ふた。

その後漸次諸伽藍の再建、造立をなして、現在の校堂（間口十五間、奥行十四間半）は天明六年三月の重建にかゝるものである。その他の伽藍には、三祖堂、釋迦堂、經藏、三門、鐘樓、藏書、集會堂、書院、寺務所、對面所、庫裏、食堂、藥師堂、關廣堂等が疊々並べてゐる。（實質は善導寺境内）

淨き友の會拾二月例会御案内

一、日時 十二月八日（第二日曜）
午後二時（晝）

會員荒井氏が満洲へ赴任せられますので、さうやかながらその行を壯んにすべく夕食を共にして送別の會を開きます。御なじみの方々は勿論御知じお誘ひ合され御來會下さいまし。

（講話は中村辨廣先生）

淨き友の會幹事



京都市 竹内 はじめ

越けらの羽すりあはせすり合せ祈るが如く啼き迫るかな

許秋のあはれを越の音に聞かんと感じた作者の心から出た歌である。調子も高く朗読するのにふさはしい。

最良縣 豊田 千代子

青空の映る鏡に向ひつゝ梳き解く髪にさやけし

許前の作が秋のさびしき心細さを云つたのに反しこれは秋の快さ、たのしき、なつかしさを、鏡に向つて髪を梳きながら感じてゐるのである。爽やかな秋の氣が流れるやうである。

埼玉縣 小 沢 清秋

派手やかに装へる女見ることに足ることを知る妻を思ひぬ

許行きずりに逢ふ女性の顔手に華やかに装つてゐるのを見て、作者はよと家来を思つた。自分は妻によい装飾をしてやれぬ貧しい身であるを悲しむ一面に妻が、足ることを知つて、この女達のやうにケババしいなりをしたがらぬ徳を思つて、此か安心する夫の心をよく出してゐる。

徳島縣 丸 岡 長壽

ゆたかなる秋の稔を樂しみてはげ

みし我田色づくきにけり

續野海軍病院 守 都 隆徳

病院で戰友と再び逢ひて云ふわれら武運の拙なかりきと

堺市 木 金 澄弘

生きてよく死ぬるも安し大君に命ささげし益良男のとも

小樽市 中 村 もん

紀元二千六百年記念式典に大いなるこの式典をおふけなく仰ぐ此の世と機を正しぬ

徳島縣 海 部 山人

吾友郡司島誠也師の計をききて諸行無常今にして思ふみ佛の千古の教身に泌めるかな

山口縣 木 屋 政子

よろこびもはた悲しみもみ佛の大いなる手に任せまつりて

愛知縣 長谷川 翠吾

ゆたかなる稔の秋の野に立てるわが頬赤らみ力あふるる

北海道 花 田 順住

いつしかと時の流れに移されて我身も老いとなりけるかな

群馬縣 一向 山人

生死の境にありて歌思ふ強きやさしき益良男しのぶ

栃木縣 大 輪 云海

醒めてそと明けゆく空を眺むれば巖啼く山の町となりけり

京都市 西 島 春人

佛具等も戲せよと云ふ記事のあり刻々進る時代の空氣

京都市 望月 久次郎

嶺の上たゆたふ雲の今朝見えす空の晴れつつ寒さ加はる

東京市 細田 初枝

眞心をこめて送りし一輪の花にも笑まふますらをのとも

奈良縣 寺 田 定信

無始よりの積りし罪は重けれど念佛にかるく病いえたり

東京縣 柳 子

雄々しくもみいさ艦に乘組みて君は何處の月を見るらん

大阪府 山下 龍章

歸國する君にむかへど柳見れど云はむ言葉はなしと思ひぬ

東京市 藤 林 貞子

明きはまりまどかにうれし林檎とり少女のごとくほほえみて見ぬ

三重縣 大 野 歩行

ほほえみてつみとられしか山百合のこのはなびらに思ひこもれる

京都市 福島 孝治郎

外づくにの御食を取りてつくづくと押しいただきぬ養原の瑞穂に

朝 鮮 領 江 八 年 坊

生命もて逢はざらめやもののは待てど歸らず大陸に死ぬ

大阪府 郡 大八一

驕が家に臥せる我らも恵あり等しく仰ぐ仲秋の月

茨城縣 伊 藤 はる

ありがたや憂ひ持つ身もしたしみて唱へつつきく淨土のをしへ

北海道 押 野 尚秀

旅を想ふ切なき我れ的心ゆく夜ごとの夢に汽車を見るらん

東京 江崎 孝雄

黒髪は煩惱たちきり尼寺の清き精舎に法尼は住みけん

はがきに一回二首以内とし「淨土」編輯部歌壇係あてに送ること。

投稿規定

女性
講壇

菩薩美への憧憬

美しさは善業の蓄積で

古屋 登代子

外面女菩薩、内心女夜叉と云つて、古今東西を問はず、傾城の美人は得て毒婦であり、妖婦であり、姦婦であるやう云ひなされて居りますが、果して形相の美は心の美と相反し、外面の醜は内實の醜の露出であるときまつて居りますでせうか。私は以下暫らく、眞の菩薩美即ち神格美と云ふことに就いて、語つて見たいと思ひます。

美醜いづれを問はず、青春處女の肉體からは、捨て難い豊潤な魅力が發散されます。然し、既婚と未婚とを問はず、かゝる肉體美即ち容色美は、長くも僅々十數年の歳月を保つことは困難です。三十歳を過ぐれば、小野小町の「花の色はうつりにけりな、いたづらにわが身世にふるながめせしまに」の古歌も傳はれ、如何に化粧に憂き身をやつしても、なほ追ひつかぬ容姿の凋落に、失望し始めるでせう。然し、年齢の如何を問はず、内的精神的に創造される美の藝術生活を、其容姿の上に現はさうとする理想への憧憬と、人格美を

追ひ求める崇高な情懷とは、容色之美を超越した幽雅な風格であり、それは徒らに感情を誇張して皮相の表現美などとは全く趣きを異にした、氣高い人品となつて、内に燃ゆるまこと、と溫かい慈悲心とが總身から醸し出さるゝものであります。即ち名は實の實と申すと同様、形體は心の偽らない姿であることに心づかなければなりません。

この人格美の輝きこそは、娼老男女の差別なく、人間として何人も憧憬の的となすべきであります。更に百尺竿頭一步を進めて、私は神格美即ち菩薩美への強い憧憬こそ、人生最高の理想でなくてはならない事を力説いたし度いのです。

かの佛敎、佛敎等に依り表現されて居る菩薩美、聖母マリヤ等の聖像を通して輝き出されて居る崇高なる女性美等の前には、年齢の老若、容姿の美醜等は、全く問題ではありません。キリストは齡三

十歳にして既に、此の崇高藝術の獲得に成功して居られました、若年の維摩の頭上には、釋迦牟尼同様、後光が熾然と輝いて居つたろうと思はれます。此の輝かしい神格美は、稀には宗教人の中にも見出される事もあり、或は名もなき市井の人の中にも間々見出されることがありますが、私の長い生涯を通じて、完全に神格美を具備しておはしましたと、畏れ多くも拜しましたのは、

明治天皇の御英姿と 昭憲皇太后の御麗容でありました。申すもかしこい事ながら、天降りました神々の御姿を、此の目で親しく拜し得ました光榮と歡喜は終世私の忘れ得ないところで御座います。

天地の美、花鳥風月の美、山川國土の美、繪畫彫刻其他あらゆる美の藝術を愛する者は、これら凡てに勝りたる、藝術中の藝術たるべき人間の中に、美を見出すことに最も強い憧憬を持つが當然であります。ラファエルの繪筆を借らない迄も、畑に麥打つ歡慶な農民夫婦の中にも、あるひは神前に拍手打つ、つましやかな未亡人の後姿にも、神格美の片鱗を見出すことがありますでせう。渡私親公、一意専心に當り菩薩衆の中に、辨財天の御容姿の宿つて居るのを見出して伏し拜み度いやうな心持ちになることもありますでせう。

形こそ深山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなん

と乞食坊主西行は、口性ない村の女共に醜さを嘲笑された時、泰然自若として歌つて居ります。この心構へこそは豊富な精神生活を

營んで行かうとする者にとつては、最も大切なことでありまして、其處からこそ、容姿の美醜等を超越した、崇高な魅力も生れ出るものであります。俗に、人三化七と呼ばれるやうな醜婦でさへも、人の心を惹きつけないでは置かない魅力を持ち、衆人の慕ひ寄る徳望を備へて居る人が、決して数少ない事を思ひ合はす時、私は後世人の想像に依つて描き出された釋迦、基督等の肖像が餘りに美男に過ぎはしまいかとさへ思ひます。與野品子の歌に

鎌倉や御佛なれど釋迦牟尼は美男におはす夏木立かな

と云ふのがあつたやうですが「御佛なれど」とありますのは、佛様だがなほ美男におはしますと云ふ反語か、それとも、美男でおはしますことに對する渴仰の讃辭であるか、恐らくは作者の意は、後者にあるのだらうと思ひます。釋迦牟尼は、其家系から見ても生ひ立ちから申しても、或は絶世の美男子であつたかも知れません。そして慈悲の權化として、心身共にシシメトリカルな完全な神格美を具備して居られたものだらうとも思ひますが、私共醜凡にとりましては「形こそ深山がくれの朽木なれ」のやうに、心がけ一つで蛇の形相をも備へ、人生最高藝術の完成をも期し得ますことは、どんなに力強い獎勵となるかも知れません。御互に何となくして菩薩美への憧憬を具體化するやう心掛けやうではありませんか。



ぐ 脱 を 殻

滋 野 藤

先年知恩院から頒布された藤原隆信筆「法然上人御影」を私は二枚所持してゐる。一枚はその當時「浄土」を通じて入手したもので、爾來居室の壁に懸けられて、年と共に景仰慕の念いよく深いものがある。

最初は知合の表具師に頼んで、恰好な軸物にでも仕立て、貰はうかとも考へたのであったが、そんな方面に大した趣味もなく、且つ不精な私は結局有合せの色紙懸に納めて、つい今日までそのまゝになつてゐる。

ところがいつとはなしに櫻の樹皮の縁を附けた圓形のその色紙懸が、上人の御影には、うつづけのものだと感ぜられるやうになつて來て、今では却つて下手なものを拵へなくてよかつたとは私は喜んでゐる。

一昨年の暮に、當地正安寺の永井立教師から私はまたこの「法然上人御影」を真贋した。そしてそのまゝ大切に藏つて置いたのであつたが、今年の春たたく私の教へ子の一人から色紙懸を贈られたので、私は早速これに二

枚目の上人御影を入れて二階の半敷に掛けることを思ひ附いた。今度の色紙懸は方形で、竹細工のものであつたが、矢張りよく似合つた。

×

そこで私は始めて斯う云ふことが分つたのである。有合せの色紙懸に上人の御影をはめて見て、それがよく適合したのは決して私自身の手柄でもなく、その色紙懸の形状や色合のせいでもなかつたのである。圓融無礙の上人の溫容はその周囲のあらゆる事物と調和し給ふことを私は教へられたのであつた。

更に今一つ私は新しい發見をして、かつ驚きかつ喜んだ。といふのは、同じ物だとばかり信じてゐたこの二枚の御影は、仔細に比較して見ると全然同一ではなかつたからである。座敷の壁に懸けられた方は生地の色が黄味走つてゐるせいか、圓熟した御風貌の何處かに智恵第一の法然坊といった鋭いところが窺はれる。たゞ薄曇の一色に統一されて、言はうやうなき慈顔の中に尊い還愚の御

奏がうち仰がれるのであつた。

私は乏しい書架から數冊の法然上人傳を取

出してそれ／＼の巻頭に掲

げられた同じ御影を眺べて

みた。そして、英譯翻修御

傳のものはむしろ前者に近

く、望月偉義師範の法然上

人正傳のそれには、後者の

趣があることを知つた。

それ以來、私は毎月上人

御命日である二十五日の朝

には必ず二階に上つて、座

敷にある御影にも禮拜を缺

かさぬことにしてゐる。

×

ギツシングのヘンリイ、ライ

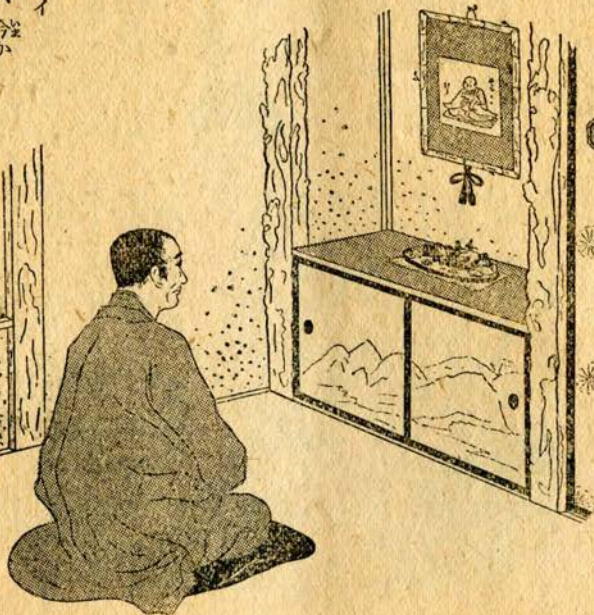
クロフトの手記を譯したのは、今か

ら五度二十年の昔になる。私は續譯とい

ふよりも、むしろ創作に近い苦しみと懺びと

を以てその仕事に没頭した當時の感激を終生

忘れることが出来ない。書齋を連れ出て、異
標に興奮した頭を休めるために靜かな野川の



ほとりには、獨り佇まねばならなかつたことが幾

度も／＼あつた。それほどすでに原作者の
魂の息吹が私の身内に響々と感ぜられたの
であつた。

先日或必要があつて久し振りに舊譯のペー
ジをめくつてゐるうちに、不圖次の一節に再
會した。

「……自分の天性には合理的な自己指導の
能力が無かつたやうである。子供の時も大人
に成つてからも、自分は自分の行手に現はれ
た譯や溜の／＼／＼に振り込んで來た。どん
な馬鹿な男でも自分程の失敗の經驗を収めた
ものはなかつた。誰も、それを得るために自
分程數多い打撃を受けなかつた。始終打たれ
たり！ 張られたりした／＼か打たれてやつと
正氣に返つたかと思ふと、直ぐまた自分はも
う一度打たれて新しい方へ出掛けていつた。

公債買つて

彈を前線に

『實際的な方面に疎い男』だと大人しく口を開く人達から自分は云はれた『馬鹿』だ——
 乾度——多くの無遠慮な舌は云つたに違ひない。そして實際自分が長い曲折に當んだ過去を掘返つて見る度に、自分で自分を馬鹿だと思ふ。明かに或物を、多少に拘らず大抵の人に賦與された或る境衛を保つ力を最初から自分は缺いてゐた。……

二十年前私は私の一生涯を豫言するものだと思ふ氣持でこれを譯出した。

×

二十年後の今日、この手記の主人公とほぼ同じ位の年齢に到達した今、再び讀返して見ても、私はこれを私自身の告白だとして、このまゝ一字一句と雖も修正する必要を認めないのである。

この譯載が世に出ることになつたのは全く同郷の先輩安倍能成氏の盛々ならぬ鞭撻と推奨の賜であつたのであるが、同氏の第何冊目かの隨筆集の何處かに、俳句の語が何かの

國を守つた傷兵を守りませう

序でに、一言私の事に言及した個處がある。そしてそれは同氏一流の率直さを以て「何をやつても板氣の續かないのがこの男の缺點だと思ふ」と云ふやうな意味であつたと記憶する。

けれども念佛生活に入つてから數年経つうちに、この私の生活にも或變化が起つた。たとへば、皇紀二千六百年の今年私は私にとつて禁煙第五年目に相當する。また冷水摩擦を始めてからもいつの間にか二冬を越した。

尤も、これ位の「奇蹟」を概に取つて能成氏に抗議を呈するなど云ふ自信のない、依然たる吳下の阿蒙であることは勿論言ふまでもないが……

×

今度突然私が氣樂な閑地に退いたことに就

て、まだ早いと云つて惜んでくれる人よりも、私の爲めにむしろ喜んで呉れた先輩や知友の方が遙かに多かつた。中には空腹に午砲を聞いた氣がするなど、冗談交りに羨ましがつて、手紙を寄越した歐人の英語教師さへあつた位である。併しいつもの私らしい出鱈目の行動にみんなが賛成してくれたのには、凡そ二つの理由があるのだと思ふ。一つは、私のやうな男が竟に妻子を路頭に迷はせることだけはしないで、盡みなりにも慰給の附く年齢まで大人しく勤め上げたのは、兎も角賞めてやつていいことだと、口に出してこそ言はないが、或安堵に似た氣持を感じなからに違ひない。

もう一つは、これは極く少數の女達だけではあらうが、暗黙の間に一つ希望條件が附隨してゐるのだ。即ち私がこれから何かに遣るだ

らうと思つてゐてくれるのである。私の挨拶
 狀を黙殺した或人達に對して私が強い失望を
 感じたと同時に、さうした期待を抱いてくれ
 る是等少數の女人の前に私は慚愧の念に堪へないもの
 がある。

x

威嚇私は煩はしい難務か
 らは解放された。これから、
 初步の英語を教へてさへ居
 れば先づ一通りの義理の濟
 むといつた譯でもある。併
 し私が所謂第一線を退いた
 のは、別に好きな勉強をし
 たいとか、新しい仕事を始
 めたいといふやうな殊勝な
 動機からではなかつたので
 ある。實を言へば、たと最
 近の私達仲間、の狀勢に歩調を合せてゆけない
 のである。教養とか反省とかに取つて代つた

偽善と追隨との雰圍氣に堪へられなくなつた
 に過ぎないのだから。

がそれは兎も角、私は茲に舊い殻を脱棄て



たのである。私が氣持の上に、時間の上にも、餘裕を得てゐることだけは間違ひない。

そして何かしら私に相應したことを始めなければならぬ一轉機に際會してゐるのである。さうだ私は私なりに、かね／＼一つの念願を抱いてゐたのではなかつたか。

x

今こそそれを果すべき機會ではないのか。私はもつと／＼法然上人に親炙したかつたのだ。

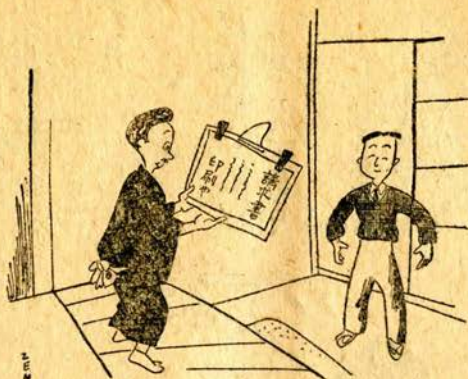
上人のいみじき饒藏の世界に更に／＼深く味到したかつたからなのである。たゞ併し、念佛の白道を進る私の足取はこれまであまりにも遅々として、蓮華ばかし食つて來た。何よりも私如き鈍根の者は朝夕懈怠なく念佛を行ふることから出直さなくてはならないのだ。

だから、私の家の壁に上人の御影が二葉懸つて居ても、それは決して多過ぎるといふことはないのである。

(橋本禎高畫)

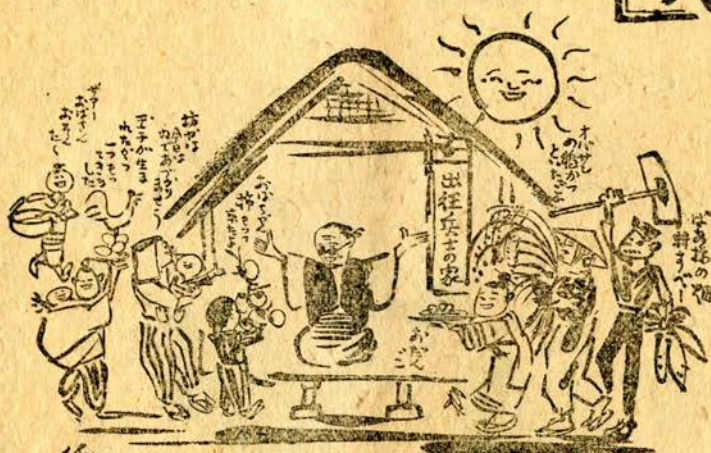
淨土娛樂室

マンガ集



印刷屋の廻覧板
紙の刷割を考へました。

山崎善一



一人のこつたお婆さんの家
新體制下の隣人愛、奉仕の心は佛陀の御教への中にも
ありました。

小野佐世男

笑話

(投稿歓迎)
(諷刺を忌む)

何が、いゝ

ある料理屋に入つた客が、周りが混然として塵で汚れてゐるのに氣がついてソツト女中を呼んで尋ねました。

「ねえ君、ここの料理場も随分汚いぢやないかね。せめて何が一番いゝのか訓へてくれないか」と女中はグツト膝をひそめて云ひました。

「何も云はずに他店にいらつしやるのが一番ですわ。」

(埼玉大島生)

暗中の大亂闘

君の家に來る途中でね、黒山の入だかりがしてゐたのさ。暗くて

寒 稽 古 を ぎ 原 賢 次

「さあ先生をデヤン／＼打ちこんで
大分暖まつてきおつたワイ！」



木枯の人情 川口 久

「イヤア毎度掃除してくれまして」
「イヤイヤ私こそ、たきものをいた
ゞきまして……」



一 億 一 心
大 乗 建 設

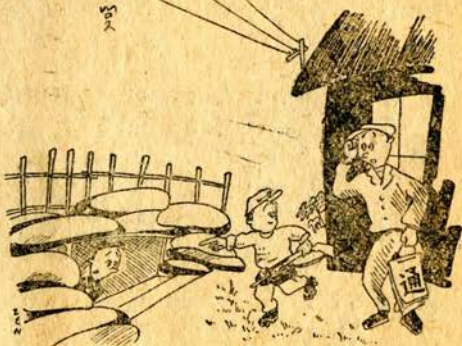
おはなしか 大晦日の家庭防空壕

山 崎 善 一

「お父ちゃんは朝から、こ
こにゐるんだヨ……」

ホラネ……」

生活は簡単に、心
は常に朗らかに！



よくは押らなかつたが、これは大
變なことがあるに違ひないと思つ
て、僕も急いでその家の方に行つ
てみたのだ。家の中から煙々と電
燈の光りがもれてゐて、窓からは
五六人の屈強の若者が、まさにく
んずほぐれず大觀劇の眞最中なの
が見えた。僕もハット脱ぎ、走つ
て行つてみたからね、何んとその家
は柔道の道場だつたのだ。

(廣島・A・B・C)

せめてもの事

出入りの洋服屋さんが申した。

「あのAさんには弱りましたよ。洋
服代を一文も入れずに何處かに引
き越してしまつたのですからね。
だがせめてものことは、その洋服
代を三割までおいたので、まあそ
れだけ損を少くしたわけですが」

(東京・田澤 清)



▽宗教地方色……四……△

矢持村の和尚

共同販賣店の出来るまで

増 谷 文 雄

一

今度、私は、三重縣をまわつて、津市と宇治山田市とで、部落經營に關する座談會を司會することが出来ました。

新體制の成否は、帝國の前途に對して重大この上もないことではありませんが、新體制がうまく行くかどうかの實際は、地方において、部落經營がうまく行くかどうかといふ地味な問題が、これを左右するだらうと言はれてをります。

そこで、この三重縣を選んで、部落經營に關する座談會を開いたのでありますが、さすがこの縣下には、全國的にもすぐれた部

落がすくなくなかつたのです。その中でも、伊賀の矢持村の奥鹿野といふ部落は、おどろくべき經營をやつてゐる部落でした。

この村の村長磯田さんは、例の新體制準備委員だつた岡崎さんの下で、全國町村會の副會長をやつてゐる人ですが、丁度、座談會の前々日に奥さんを失くしたとのことで、出席の通知はあつたものの、とても出席はあるまいと残念に思つてゐたところ、當日の朝、會場に行つて見ると、もう磯田さんは、村の先生と青年團長をつれて、會場についてをりました。

私も、おくやみの言葉のべて、とり込み中の出席を謝すると、

「お約束したことから……」

と、當然のことのやうな辭をしてをります。この村長にしてこの村ありと、私どもは、本當に感銘ふかく語りあつたことでした。

二

この部落の經營ぶりのすぐれた點は、一々述べてゐると限りがない位ですが、その中でも、最も感銘ふかく思はれたのは、奥野部落の公徳販賣店のことであります。

ここは、賣店と言ひ條、おどろくことには、店員も賣子も、誰もゐないのです。村の人は、みな鑛をもつてゐて、自分で開けて賣店に入つて、自分で品物の分量を計り、數量をわざと、自分で傳票をかき殘して出てくるのです。

賣店の入つた正面の上には神棚がまつてあつて毎朝一ばん初めに入つたものはこの神棚に御燈明をあげ、檀手をうつて禮拜をしてから、品物を自分でもつて来る。品物をもつて出てくるところには、



大きな鏡があつて、品物をかへた自分の全身をうつす。そこで人々は、自然と自己反省のチャンスと興へられるのです。

こうした思ひ切つた經營をやつてゐて、一厘一毛の不正がおこなはれないといふことは、まるでこの地上のこととは思へないのですが、それが今日でもう十二年もつゞいてゐるとのことです。ある時期には、一寸の間、賣子をおいたことがあつたが、賣子をおいたために却つて計算の間違ひがあつたなど、まるで笑ひ話のやうです。

私は、この公徳販賣店のことを聞いただけで、すでにこの村が如何にすぐれた村であるかを知ることが出来たと思ひました。この村の人々の精神も物質も、いかによく統制されてゐるかを推察することが出来たと思ひました。新體制下の部落が、みんなここまで來ることが出来たとしたら、さぞかし素晴らしい日本が出来ることだらうと思ひました。

しかし、この村に於ても、何の苦もなしにこの公徳販賣店をつくるが出来たわけではなかつたので

す。

三

この公徳販賣店は、どのやうにして生れたのか。私は、その點を突込んで質問して、そこにこの村の和尚の本當の僧侶らしい行爲のあつたことを知つて、心の中で幾度も幾度も満足の笑顔をにつくりました。

この賣店の昨年度の賣上高は、二千六百八十五圓だと言つてゐました。だから、この賣店が出来以前には、この村の人々は、この程度の物資をすべて他村で買つてゐたのです。いな、この村に商店のないことにつけ込んで、この程度の物資に、更にうんと口銭をかけて買はされてゐたのです。

そこで村の人々が、今から十數年以前に、共同販賣をこの村につくる計畫を相談しはじめました。その時、その共同販賣店の責任は自分にもたせて呉れと申し出たのは、この村の和尚さんだったのです。

和尚さんと共同販賣店とは、すこしその取組がおかしい。何となくおかど違ひの申し出だと思ふので、みんながげげんな辭をしてゐると、和尚さんは、やをら自分の理想をのべるのでした。

和尚さんは、自分の責任において、その共同販賣店を、賣子なしの販賣店としてやつて行きたいと言ひました。この和尚さんの理想案には、みんな聞いた口がふさがらぬ思ひをしました。

「和尚さんも、あんまり世間を知らなすぎる。」
と非難するものもありました。

「和尚さん、この道ばかりはまた別でしてなあ。」
と忠告するものもありました。

だが、和尚さんは、一個の信念をもつてこの理想案を提出したのでした。決して、一時の思ひ付や、足腰の浮いた輕率な案ではなかつたのです。

和尚さんは、この部落で、教化部といふ役目をもつてゐました。まさに、和尚さんに打つてつけの役目です。その役目に對してこの和尚さんはどこまでも眞誠でありたいと願つてゐました。

今度、共同販賣店をつくるにしても、もし自分の受持つ教化といふことが村民に充分に徹底してゐるならば、この販賣店で不正をする者はない筈である。もしも賣子なしの賣店で不正をするものが多ければそれは教化がまだ／＼行渡つてゐない證據である。

もしも、弊害が生じた場合には、自分は衣でも要麼でも、買においてでも補ひをするつもりである。だから、どうか自分の責任において、この販賣店をやらせて貰ひたい。これこそ自分の教化が行きとどいてゐるかどうかを知りうる絶好のチャンスである。

和尚さんの熱心にして眞誠な希望は、つひに、みんなの危惧を抑え、みんなの賛同を強奪して、共同販賣店が、和尚さんの責任において、店をひらくこととなつたのです。

だが、事金銭に關し、慾に關する道は、村の人々が危惧したごとく、やはりこれだけは別でありました。

四



和尚さんは、この賣店に賣子をおく代りに、更に一段と、村人の教化に努力をかけました。これまでの継続教化で、この村の人々はたしかに、他の村の人々よりも、一段も二段も、すべての點にすぐれてゐるやうに思はれました。その上に、更に教化に努力をかけて、その結果が共同販賣店の賣上げに、どんな具合に現れてくるか、和尚さんはかなりの自信をもつてゐたのですが、一年度の終りに計算してみると、何と、三百五十圓からの缺損が出て來たのでした。

品物を二つとつて、一つ分だけ傳票をつけて來るなどといふ者はなかつたかも知れないが、砂糖を一斤かつてくるのに、それを自分で計算するのであつて見れば、どうしても掛け算がつかなくなつて來るのが人情でせう。その人情がつもりつとつて、三百五十圓の缺損を生んだものと思はれます。

その缺損を、和尚さんがどうして、んぼしたか。要するに衣を賣においていかどうか。その點はきゝもらいましたが、その翌年度も、また和尚さんは、どうしてもこの共同販賣店を自分の責任においてやらせて貰ひたいと主張しました。

村の人々は、また和尚さんに缺損をかけては相済まないから、やはり賣子をおいた賣店にしてはと申出ましたが、和尚さんはどうしても聞きません。

この缺損は、要するに、自分の教化の力の不足を意味してゐる

る。この鰯の出てこないやうな共同贖賣店が出来るまで、どうしても行かねばならぬ。金銭の問題ではない。教化の問題であり、精神の問題である。この問題が解決できぬとあれば、自分は教化部長もやめる。和尚もやめる。

さうした和尚さんの決意に、村の人々はおされて了ひました。そして、もう一年、和尚さんに御迷惑をお願ひすることゝしました。和尚さんは、いよいよ教化に努力をかけて、賣子のない賣店のなり行きをじつと見詰めてゐました。

今度は、立派な成績があかりさうに思へました。村の人々もみずみずしく、自肅自戒の態度をもつて共同贖賣店に入りました。だがその年度の末にはやはり三十五圓の鰯が出たのです。

五

「この道ばかりは別だわい。」

村の人々は、みなさう思ひはじめました。だが、和尚さんは失望しなかつた。三百五十圓が三十五圓と減つた。そのことが既に、それだけ村人の精神の向上を語つてゐるのである。和尚さんはさう信じた。そして次の年には、この三十五圓をも絶滅してみせる意気込みをもつて更に第三年度の經營を申し出たのです。

村の人々は、この和尚さんに、この上の迷惑をかけるに忍びない思ひをしました。しかし、和尚さんの決意はどうにもすること

が出来ないことを知つてゐました。善良な村の人々は、どうしてよいか、全く途方にくれたのです。

その時、村の婦人会が、つひに動いたのです。

この共同贖賣店に入入するのは、主として私ども婦人であります。私どもは、悪いことをしてゐるつもりはなかつたが、まだまだ自肅が足りませんでした。まだ／＼小さな悪心を抑へ切れなかつたのです。そのために、和尚さんに、大へんな御迷惑をかけ、また村の人々には、い／＼御迷惑をかけてゐます。これは、私ども婦人たちの、自覺の不足から來てゐたのです。

だが、もうよく解りました。もうこの上、この共同贖賣店には、一鐵一圓の鰯もかけません。一つぶの米、一さじの砂糖にも、決して我意をうごかしません。

だから、どうかこの賣店を、婦人会の責任に、おゆづり願ひたいと、和尚さまのところに申出てきたのです。

和尚さんは、その申出を心よく容れました。和尚さんの謙は、本當に満足さうにはゝゐんでゐました。それ以來、今年で十二年になるとか。その間、前に申したやうに、一圓一毛の計算ちがひのない立派な公益贖賣店として來てゐるのですが、その基をきづくについて、この和尚さんの大きな信念の力が、何より偉大であつたといふことは、われ／＼佛者としては、本當にうれしく、感謝ふかく思はれてならないのです。

川柳について

選者 西島

○丸

「川柳は人戯である」「俳諧の正系を繼ぐものは川柳である」「川柳は生活詩である」今の川柳を作るものは、水でも呑むやうにこり言つて居る、滑稽、快味、穿ち、こういった事を否む譯ではないが、今は嚴肅な氣持で人生を見詰める事にして居る。

どう坐り直してみても我が妾
川柳を人の悪口をいふものと誤解して居た人々はこうした我黨の川柳に對してどう思ふだらうか

咳一つ聞こえぬ中を天皇様
川柳を下品な文藝と思つてゐた方々は、この川柳に對してその認識を改めない譯にはいにくい。なる程一部には下卑た句が多かつた。子供が馬や犬の畫を描くとオシッコをさ

るのである。我々とても

鷗ちりの骨飛行機の落ちたやう
といふやうな發見でも

三匹になるとドラ猫歩き出し
のおかしみでも決して避けるものではない。併しあくまで眞面目な氣持を要求する、鋭い詩の目を欲する。

ことに私は川柳は作るもので無く、流れ出すものであると年中言つてゐる、正しい人間から自然に出て来る十七字それが川柳であると信

せる加筆をする如く、人間にはきかない一面がある、態所にそれが現はれる。拙手を互に潑る、釣り易いの

にて居る。
川柳は江戸で發達したもので、江戸ツ子にはいろいろ缺點があるが、同情、明瞭、嚴潔、こころした空氣が充ちてゐる。その中に發見して來た川柳も十分その點をうけてゐる事に注目されたい。

第一、初めて川柳を志す人には、季のない人情味の勝つた俳句を作る氣持で手をつけられてはいいかとも思考してみよう。

！設新の壇柳

會員各位の御希望に答えて、新春正月から「淨土柳壇」を新設いたします。選者に、西島○丸氏にお願ひしましたところ、同氏はこれを快諾せられ、ここで陣容が整つたわけですが、西島○丸氏の選句は必ずや會員各位の御満足を得ることゝ信じます。尚別項「川柳について」にある通り、選者は初心者、續出に興味をもつてゐますので、ドンドン御投句下さるやうお願ひいたします。投稿規定は官製はがき一回に二句以内とし、「淨土」編輯部川柳係あてにお送り下さい。

法然上人

和歌註解(四)

安西覺承

であらう。

【感想】一向専修を一言にして
 進破せられたお歌である。このやう
 な理窟つぽい題材を詠んで然も理窟
 つぽく聞えないところが妙である。
 いかにもさら／＼と輕快に歌はれて
 るのではないか。秀れた技巧のため
 である。懸言葉の敘景的な意味が餘
 韻として響いて、理窟つぽさを抹殺してゐるからである。これは
 難波でお詠みになつた歌である。それを思ふと技巧に一段の生々
 しさを感ずるであらう。いふまでもなく口稱念佛はみ佛の本願の
 行であり決定往生の正業である。その外の行は修し難くて往生も
 不定であるから、輕快な歌調のうちにも斷然之を排されたので
 ある。

極樂往生の行業には餘の行をさしおきてたゞ本願の
 念佛をまつとむべしと云ふことを

あみだ佛といふより外は津の國の

なにはのこともあしかりぬべし

【語意】

○津の國の「なには」の序、津は御津。○なには「難
 波」と「何は」と懸けてゐる○あしかり 悪しかりであるが「津
 の國の難波」を受けて「難刈り」を響かせてゐる。難波は古は
 瀝の名所だつた。○べし、推量。

【通釋】

南無阿彌陀佛と稱へる外は如何なる餘の行業も懸い

【參考】

この歌は夫木和歌集卷三十四釋教の條にも見えてゐ
 る。傳説があつて、これは後白河法皇が上人と日想觀を修し給う
 た時建立せられた四天王寺西門の西、荒陵の新別處といふ御堂の
 西の小壁に、上人の筆で名號を記しその傍に書きつけられたお歌
 であるといふ。四天王寺西門の西北、茶臼山の傍に一心寺といふ
 淨土宗の立派なお寺がある。これがその御堂の跡であつて、かの

御目録の各號も今に在し世に難波各號といふのがそれである。

極樂へつとめてはやくいでたしば

身のをはりにはまわりつきなん

〔語意〕

○つとめて「早朝」と「勤めて」の懸言葉。○身のをはり 人の臨終を指すのはいふまでもないが、つとめて以下を受けて「美濃、尾張」を響かせてゐる。逆に「身のをはり」から前句を見ると「早朝」が若年の時の意味を含んで来る。○なん完了を豫想するかたち。

〔通釋〕

（京を早朝出で立つたならばやがて美濃尾張にも行き着けるやうに）極樂へと若いうちから勤めて早く志して念佛修行相成らなかつたならば、必ずや最後臨終の夕にはかのみ佛の國へと往き生れる事を得るであらう。

〔感想〕

身のをはりの懸言葉を味ひながら誦してゐると、何ともいへない一種愉快な調子を覺えるのである。それは前の歌とよく似た輕快さであり、一層心も弾む明るい欣求の調である。若年から早く志せといふのは勿論「乃至十念」の輩を排することではない。老少不定はこの世の鐵則である。だから勤めて早く

は別に多年の修行を要求するといふのではないのである。しかもこの世に生きてゐる限り念々相續いたすべきは信仰者に必然の行として現はれて来る筈であり、さうでなければならぬことである。

〔参考〕

同じく夫木集の同所に出てゐる。但し第二句の「はやく」が「とくと」となつてゐる。なほ拾遺集卷二十、仙慶法師

極樂ははるけきほど聞きしかどつとめていたるところなり

けり

の歌とは關係が考へられよう。所にいへばこれは梁塵秘抄にも出で、千載集には空也上人作、袋草紙には千鶴内供作としてゐるが、時代からいつて拾遺集を採るべきである。

生田花世著

銃後純情

（支那事變戰歴復興史）

植兵監 藤村少將閣下題字 情報部 西原少佐序

四六判・三八八頁 定價 一圓五十錢

發行所 道文書院

熊と念佛



木谷さんは念佛信者でした。ある日、大熊に出逢つて絶望とみえた時、無我夢中で唱えたお念佛によつて救はれました。お念佛の功德は猛獸にまで及ぶことを知つた木谷さんは、それ以後には「ほんとに腹の底からお念佛を唱えて暮せるやうになりました」と云つてゐます。このお話は大島台下に隨つて北海道に行つた吉原自覺師が、その土地で聞いた實話です。(文責在記者)

X

X

X

太陽が南の方に行つてしまつて、近頃は目に見えて晝が短くなつて來た。従つて朝と晩とは氣温がグツト下つて寒くなり、あの長い冬がすぐそばに來てゐて、いよく儲達の天下が來ると季節到來を待つてゐるやうな氣がした。

「冬のやつめは、もう大千軒岳の向ふ側さに來てゐるのかも知れねえな……」と木谷さんは獨り言を云ひながら、目の前に追つた岡の頂上を見やりながらつぶやいた。朝から曇らせてゐた薄雲が、すっかり風に吹きとばされて、空は青空、黄ろくなつた。

木谷さんの頭の中は、親類で持ちあがつた急用のこともあつたが、それよりも二、三日前にこの邊を彷徨いてゐたといふ熊のことで一杯だつた。十數年來熊が出たといふ話もなかつたのに、何處から迷ひ込んだのか、しか

大地一面に陽が燦々と降り注いでゐた。木谷さんは稚内の瀧場の方に急用が出來て道を急いでゐた。いつもなら、こゝろで一ぶくつけて廣々とした岡を眺めながら一休みするところであつたが、今日はそんな餘裕のある氣持になれず、休もう等といふことが少しも頭にのぼつて來なかつた。

も牛のやうに大きな熊を見たといふので、木谷さんの住む吉岡村でもこの噂で持ち切つてゐた。

木谷さんが家を出る時も、家の者が心配して、明朝にしたらと勧めたが、

「何にさ、幾ら大きな奴でも人さへ見れば、容易くは近寄らんものよ。」

と笑つて受けつけた。急用で猶豫のならなかつたことも事實であつたが、それよりも木谷さんには自信があつた。年こそ五十を二つも越したとは云へ、罷とつた杵づかで免許皆傳の腕前は、今時の若い者にはけつして敗けぬ自信があつた。だからよし大熊に出逢つても、何んとか



ならうといふ確信があつた。しかしここまで来て人一人通らない周圍を見廻し、目の前に廣々とした岡を見上げ、遠か後ろの方に千軒岳や黄金山の山々が重なり

てならなかつた。やつぱり年は争へぬ、今度から家の者の云ふ事を聞いてやらうと、すまぬやうな後悔に似た氣持になつた。

岡を越えれば、津輕海峡が見渡せるのだが、今日は決つと日が暮れてしまふかも知れない。それでも早く人家の見える所に行きたいと一層道を急いで歩いた。風が止んで周圍は全く静かであつた。静かであるだけ枯れ葉が少しでもガサつくとき、その度に木谷さんは目をこらして見守つた。

木谷さんは歩きながら、今まで聞いた話の中で、道で熊に出逢つたといふ話を思ひ出してみた。その中で樺太のある調査の話で、山の奥で熊に出逢ひ、大格闘を演じて、結局殺みついたまゝ谷底に落ちてしまひ、熊の頭が岩角にあたつてくだけ死んでしまつた、といふ武勇傳を思ひ出した。そして我ながら氣に入つた話を思ひついたのだと考へて愉快になつた。

「だが、この邊には谷もないし、熊の頭をくなく岩角さもないな。」



と氣がついて、まるでその巡査と熊の格闘を自分が演じてゐるやうに空想してゐたのが可笑しくなつた。

だが、木谷さんの楽しい空想はそれ以上に續けるわけには行かなかつた。木谷さんは詭方の韃木林に何があるのに氣がついた。そしてそれが直感的に熊であるとさつた。木谷さんは、アツと驚いて立ち停つた。

「ほんとに熊に出逢つただ、さあ何うすべえ」

逃げるか、かくれるか、早くしないと大變だ、木に登りたくも木はないし等と木谷さんは色々考へたものゝ一つとして良い考へは出なかつた。第一に熊に出逢つたのさえ當然のことで少しも不思議ではないやうに思はれたり、熊に出逢つたのが信じられないやうな氣

がしたりして、少しも頭が緊張してくれなかつた。その内に熊の方でも木谷さんを見つけたらしく、靜かに近づいて來た。小さな頭に小さな目を光らせながら吞氣さうに近寄つて來た。木谷さんの目には、もう何も映らなかつた。小牛のやうに大きな熊のからだが見界一ばいに擲がつてゐるだけだつた。

熊は木谷さんの前まで來て、急に大きな掌を舉げて木谷さんに襲ひかゝつて來た。木谷さんはもう夢中で熊に飛びついた。熊の腹に力一杯かじりついた。熊の方では木谷さんを倒さうと身體をもがいた。木谷さんは時に頭がボーンとして、手足の力が抜けるやうな氣がしたが、渾身の力をふりしぼつて熊の腹から離れずに格闘を續けた。木谷さんはもう何時間も闘ひ通してゐるやうに思つた。事實この格闘は一時間も續けられたのであつた。

しかし木谷さんが如何に努力しても腕力が強くても、熊の力に適ふわけがなかつた。熊がドツと自分の身體を大地に倒した時に、思はず木谷さんの手足がゆるんで、放り出され

てしまつた。だがすぐ起き直つて再び飛びかゝらうと姿勢をとつたが、長い格闘で疲れた身體が云ふことをきかず、木谷さんはそのまゝ地面に卧つてしまつた。木谷さんは無意識の内で、思はず合掌してお念佛を唱えた。

こうして合掌してゐると、木谷さんの頭の中にかすめ去つたものがあつた。それは何時か檜那寺の海蔵寺で聞いた話であつたが、今から凡そ百年前のこと、矢張り北海道で善導寺といふお寺を隠した霧州上人といふ坊さんが、或る時山中で熊に出逢ひ、お念佛をさすけたところ、熊は霧州上人に爪一つかけず立ち去つたといふ話であつた。

木谷さんは熱心にお念佛を唱えた。何の位唱えてゐたか判らなかつたが、その邊一帯はすでに夕暗が迫つて、折から中天にあつた月が冷い光りを投げてゐた。木谷さんは熊が襲ひかゝつて、今にも自分の頭が打ちくだかれると思つたのに、一向にそれらしい様子もないので、お念佛を唱えながら自分の頭りを見避した。すると熊の方では木谷さんの頭りを

グル／＼廻つてゐるだけで、木谷さんを襲つて来るやうにもなかつた。

そこで木谷さんは思ひ切つて立ちあがり、すぐそばの藁に火をつけ、熊はその火を見て暗の中に逃げて行つてしまつた。木谷さんは初めて訪かつたことを知つた。泣きたいやうな笑ひたいやうな氣持であつた。身體中泥だらけになつたまゝ、目的の道の方角に歩き始めた。疲れ切つた身體がフラ／＼して、いつも慣れてゐる道なのに、あちこちで躓いた。木谷さんは「わしは生きてゐるのだ」訪かつたのだと頭の中で繰り返しながら、稚ら、口には聲高くお念佛を唱えながら、稚ら

陸海軍病院慰問淨土

寄附者芳名（略敬稱）

二 圓	新潟縣糸魚川町	佐藤善肇
三圓六十錢	平市九品寺	遠藤心光
二十五圓	京都左京區永觀堂町	東山中學校 教職員生徒一同
一圓二十錢	大阪市天王寺區堀越	柳川竹次
二 圓	大津市徳町	住友持一
三 圓	大連市山縣通り	金田誠介
一圓二十錢	明石市西戎町	福田英太郎
六十錢	山梨縣南都留郡寶村	大前寛明
一 圓	山梨縣南都留郡開地村	程原一幸
二圓四十錢	品川區大井元芝町	大津玄察
二 圓	滋賀縣蒲生郡朝日村	奥田倉治
一 圓	萩市瓦町	蓮池院

の瀕場指して一目鏡に道を急いだ。



談 相 仰 信

弘法大師の書の意味及び 伽藍建立等の功德と信仰 との相違

問

小家庭秘蔵の品で日本屈指の名鑑
定家に依り弘法大師真蹟の保證

を與へられ居るものの左記の
文句に就いてお尋ね致します

發心盲深心慚愧我等今日作
何福業修何功德以報父母深
恩從今後世孝順男女聞此教
時依之修學

佛告大衆善男子善女人若
發孝順心爲父母出家修道

是爲報父母深恩若能爲父母建立伽藍修諸
功德是爲報父母廬產

饒命帝御宇

弘仁七年丙甲三月廿一日寅刻書 空海印

一、右の正しい讀方を假名交りて御教へ下
さいまし。

信 仰 相 談

(質問歡迎)

擔 當 中 村 辨 康

二、此句の中の「此教」とは何を指して居
るのでせうか。

三、父母の恩に報ゆるに「出家修道」とか
或は「建立伽藍修諸功德」とか云つて居りま
すが、信仰の正道に入ればさうした必要はな
いかと思ひます。西行や荆菫のやうに妻子を
捨て、佛門に入り修業しなくともよく、むし
ろ却つて時としては父母の恩に反する行爲と

ならぬとも限りません。また伽藍を建立する
ことも、自己の心中に無形の伽藍を建て信仰
の光を宿せばよいものではありません。諸
の功德の修積も亦た同様で、正直親切特に人
の窮乏苦難を救ふなどの陰徳を積めばそれで
功德の修積となる筈で、特別に表面的功德を
修する必要があるまいと考えられます。右の

原文が直ちに釋迦の原文とす
れば、其信仰は甚だ形式偏重
の弊に陥つて居るのではない
でせうか。それを無批判に信
奉せられた弘法大師も其信仰
甚だしく低級卑俗且つ幼稚な
ものとの觀が致します。彼の
達磨大師が梁の武帝に向つて
伽藍の建立佛像の彫刻が「無功德」であると
喝破した信念と比較して、はるかに及ばない
やうな氣が致します。本件に對する御高見詳
細に御洩らし下さい。

四、右原文の最初の發心から修學までは弘
法大師の作られたもの、佛告から廬產までは



の御指導を煩はすことが出来ますれば仕合せ

經典の文句と見てよろしいでせうか。若し經典の句とすれば、何經の何れの邊にあるのかそしてそれは釋尊の何歳位の時、何處で、誰に向つて説かれたものを御伺ひしたいと存じます。

五、臨産とは分娩時の苦難を意味するのでせうか、それとも妊娠から分娩——哺育までも込めて云はれたものでせうか。

因に右の文章は弘法大師四十三歳の三月二十一日の拂曉即ち大師畢世の大事業たる高野山開設直前の筆蹟で、小品ではありますが、一點一劃渾身の力を籠めて認められたものであつて、大師の筆蹟中にも本品程の力筆は之を他に見ることが困難であります。従つて大師の信仰の中心點の記述かと推察出来ますが自力宗伽藍宗教時代とは申しながら、極言すれば稍信仰の邪道ではないか思はれ、聊か了解に苦します。何分の御指導を煩はすことが出来ますれば仕合せ

でございます。

答

(長崎 増田 策 一)

御覽ねの弘法大師の書蹟に就いて正確を期する爲に、眞言宗の聖門學者に覽した方がよろしいと存じましたので、大正大學教授宮崎榮雅師に人を介して(一)正しい讀法、(二)發心乃至修學までは弘法大師の文章か、(三)佛告大衆以下は何經かの三點をお覽ねしましたところ

(一)讀法は

發心して言はく、深く心に慍懣す。我等何の福業を作り、何の功德を修し、以て父母の深恩に報ひん。今より後世孝順の男女、此の教を聞かん時、之れに依つて修學せよ。佛大衆に告げたまはく、善男子善女人、佛大衆に告げたまはく、善男子善女人、若し孝順心を發さば父母の爲に出家修道せよ。是れを父母の深恩に報ふとなす。若し能く父母の爲に伽藍を建立し、諸の功德を修さば、是れを父母の臨難に報ふとなす。

(二)發心乃至修學までの好 弘法大師の文に

見當らず。疑問なり。

(三)父母恩重經ならん。

以上のやうな御回答を得ました。最も之れは大正大學の石原教授とも御相談なさつて御回答下さつたものの由であります。

次ぎに御覽ねの五項目について左に申し上げます。

一、宮崎教授からはかへり暨及び送り假名を附してよこされたものを、御注文通りの假名交りにして申し上げたのです。

二、「此教」とは無論何かの經典の文句を指して居るのでせうと思ひます。

三、貴君の御説は一應御尤もとは存じますが、淨土教流の純粹信仰と、聖道門流の「修證功德」とを混同して居るもので、そこにはつきりした區別をつけて居ないところから起つた疑問に過ぎません。また禪宗の達磨大師の語を持ち出して比較なさいましたが、禪宗の「寂然無聖」の立場から云へば、一切の形に懸はれたもの「大信」と云ふ精神的な姿までをも含意し盡くして、全く提はれない姿で



たる心を強調するので
すから、かゝる形式的
な問題を排拒すること
は云ふまでもありませ
ん。随つて今さうした

第一義的な立場でなく第二義的な生活事實に
就いて言はふとして居る場合でありますから
第一義な立場と比較して論じてはならないの
です。視察と雖も生活事實の立場に立てば決
して形式を否定してはおりません。第一義教
に孝順しなければ第一義的な「無功德」を唱
導することさへ出来ないではありませんか。
修徳修教しなければ断然無望にも達し得ない
でせう。

また人にして父母の重恩に報ひる心のない
ものは禽獸にもおとると云はねばなりません
今の問題は父母の恩に報ひるのに何うするの
が、最もよいかと云ふ問題なのです。其の間
題の範圍を越へて信仰と比較し、普通と比較
する人の方が悪いのです。

大悟したのちの生活事實、入信したのちの

生活事實が、權衡的には道義以上であつても
生活行為が道徳と反してよい筈はありません
世間一観人と埒しい經濟中心主義ではないけ
れども生活的には經濟無視は到底出来ないや
うに、道徳中心主義ではないけれども道徳を
無視するやうな宗教や信仰は排拒されてよい
ものです。

今は信仰の内容や普通の内容を論ずる場合
でなく、いろいろの考行の中で何が最も大き
いかを云はうとして居るのです。そしてそれ
はまだ「淨土教」開闢以前の時代に於ける考
へ方であることを最初に心得ておいて眺めな
ければならないのです。それからもう一つ、
「出家」と云ふことに就いて、印度釋尊時代
に於ては（ヒルマヤタイ國などは今でもさう
ですが）出家と云ふことは、今日で云へば、
「學校」に入學するのと同様な「學問」の爲
であつて、一定の期間が過ぎれば、家に還り
家の職業に従事したのです。其の中に特別に
一生を教團の中で過ごす人もあつたから、職
業的出家と混同され得ますが現在支那や日本

で見るとな出家とは意味が大變違つて居る
ことをも考慮の中に入れて置かねばなりませ
ん。

之れは大體婆羅門の風習に従つたものです
婆羅門族の人々は少年時代出家して學問壯
年になつて家に還り妻を娶り子供を設け、職
務に努め、老年になつて再び出家し遊行した
り或は苦行林に入つて修行したものです。

我國に於ては大體支那の出家に見慣つて一
生涯出家僧を過しますが、それでも藤原時代
には「捨世派」や「律」の人々を除いては大
體在家の人々と大差がなく、中には妻子もあ
つたのですし、在家の人でも剃髮染衣して謂
ゆる入道翁をして居る人々も澤山あつた譯で
す。ところが徳川時代になつて眞宗以外は無
妻主義素食主義禁酒主義等を規定して、之を
禁じたのです。貴下の云はれた西行法師や嵯
童入道の如きは「捨世派」に屬すべき人であ
つて一般的な僧侶でなく、ビュリタンの聖
的な人であつたのです。藤原時代ではかゝる
捨世派の人々も相當にあつたのですが、多く



談相仰信

は公卿の二男三男が塾生の道を求めるべく入山學道し僧綱僧官を得て、言はゞ學者にならうとした譯です。かう云ふ風習をあきたらず思ひ、支那風の正しい出家人たらしめた人々は誰ゆる「黒衣僧」として全くの捨家棄親の清淨生活を以て一生を貫いたのです。然し何れが正しいかはよく判りません。

釋尊の意圖は何處にあつたか本當のことは知りませんが、優婆塞優婆夷を認め、一般人には特に午後の時間を留めて施事(職業道德)或事(生活態度)などを説いたと云ふことですから、一生を教團社會教育の仕事に盡くす人々の必要も無識認めたでせうが、御自身自らも一般人の生活意識の向上等に對して十分に力を盡されたであらうことが注意されます。しかも教團人は生産的な仕事に従事することを許されず、偏

に勉強と修業と教團維持に努めさせてゐたのです。何うしても外部からの補助が必要と

され、食物、衣服、醫藥臥具住居等が外護者に依つて補給されねばなりません。だから「建立伽藍」とか「修證功德」とか云ふことも「出家學道」の出来ない人々に取つて「出家學道」に次ぐものとして推奨されたのであり、また功德ありとして認めざるを得なかつたわけであらうと存じます。

以上のことを基礎にして此問題を考へると多分もうハッキリなすつたことと存じますが出家學道することはそれだけ社會文化に功獻することであつて、ただ單に父母の心を慰め父母の衣食住を豊かにし、父母の安らかさを求める行爲以上に(無論それも必要ではあります)父母の功獻として(子のあるはその父母ある故ですから)尊敬されますから、有限的な孝行よりも無限大にひろがつて行く大きな功ある孝行としてよい譯です。但し後世の捨家棄親の個人的意味のものと違ふことに御注意願ひます。従つてそれは孝行としては第一義的なものであり、大ぎの「建立伽藍」等は出家學道の人々の修業を助ける「學校建

築」であつて、學道に次ぐ社會的功獻であり功德でありますから、第二に推奨されたのであり、第三にはいろいろの功德(あなたのお越べなつたものは皆なこの中にはいります)もまた社會的意味に於て個人的關係のみの孝行よりもより大なる孝行と見たものであります。

また功德と稱せられるものの中には「世禪」と「戒禪」と「行禪」との三種が擧げられて居りますが、世禪は一般道徳であつて父母に孝養し、師長に仕へる等のことを云ひ、戒禪は惡をやめ善をなし生活を清くすることを云ひ、行禪は覺醒を中心に自らを學問に依つて高めると共に多くの人々の向上を促す等のことを云ふのであつて、何れも大切なものですが、その中でも行禪を以てより大いなる禪として居ります。

之れで大體お分りになつたと存じます。之を信仰から論じ悟りから論ずれば、無識あなただの仰しやつた意味になりますけれども、それでは今の問題の範圍から遊脱してしまふの



です。別の問題になる
譯です。

四、眞言宗の方から
は、弘法大師の著作中に
はかうした文章は見當

らないと云つて疑問にして居られますが御所
持のものが本當に大師眞の經ならば弘法大師
の作とするより別に仕方がありますまい。文
格の上から「疑問」だと云はれたのか、若し
くは現在する大師の著作されたものにないか
らと云ふだけでさう云はれたか、そこまでは
分りませんが御註しの各鑑定家の言葉に信憑
すれば大師の作としてよいでせう。

次の「佛言大家」以下は「恩重經」の一節
であらうとの事でしたから書店から買ひ求め
て讀んで見ましたが恩重經の中には見當りま
せんでした。尤も「恩重經」は日本所産の傳
經です。それで此の文句が何經にあらうかと
藏經目錄と首つびきで、それらしい經名を、
例へば「父母恩難報經」だとか「報恩奉公經」
だとか「孝子經」だとか「出家功德經」だと

か云ふのを調べたり、密教關係の經を見た
りしましたが、見付りませんでした。かうし
た些事に貴重時間を費すのはおしつかつたけ
れども、かうした疑の文句は何經にあるや
うに想像されますので、見付らないかと思つ
て一切經をひねくり廻しましたが、不幸にし
て今の處少い日數では遭遇し得ないのです。
落ちついて調べたらあるかも知れませんが、
何分にも餘裕がありませんから、止むを得ず
中止しました。

然し乍ら佛教經典は「一時何處そこで」と
云ふきまり文句になつて居りますから、何時
と云ふことは分りません。特殊な記事でもあ
れば推定されますが、一般的に歴史「時代」
はないのです。だからさう云ふことを御尋ね
になつても本當の事は分る筈がありません。
例へば天台で云ふ五時説は釋尊が成道して、
「華嚴經」をお説きになつたが聽衆は「譬の如
く唾の如く」でちつとも分らなかつたので、
止むを得ずくつと程度を低くして「阿含經」
を説き漸次に般若經若法華涅槃と進めて説か

れたと申しますけれども、それは天台大師の
經教上の考へ方であつて、歴史的な事實に
はあてはまりません。大體「初轉法輪」は四
諦八正道離處中の御説と云ふこととなつて居
り、華嚴般若法華等は皆な方等經典中の一部
であつて、般若思想の勃興は釋尊滅後五六百
年以後であり、それから維摩、法華、華嚴等
はよほど世が進んでからであると學者は云つ
て居ります。阿含部の經典にしても、優陀那
とか法句經とかは大分古いもので、わけても
現存佛教經典中の最古のものは恐らく優陀那
であらうと推尾博士も斷定して居られる位で
すから、歴史的事實として、何時何處で誰に
と云ふやうな要素は何にもありません。

五、臨産と云ふのは分娩時の苦勞を云つた
ものです。それは「母」だけの苦しきものであつ
て父の苦しきみではあるまいと云ふ疑問が起り
ませうが、父の臨中を推察し又は父のその時
に於ける東奔西走を考へれば、共に臨産の苦
はある譯で、その恩に對して「盡立伽藍」等
が擧げられて居るものです。



大森 森田 法見

一つづ、逃げぬ草を獲りにけり

評 草野に行つて数多くの草を一時に發見した折、作者の感懷が如何にも詩趣的に正確に表現されてゐる「逃げぬ草」が體味のない採入法であり、面白い。

米子町 宮 本 清

涅槃圖の體は哭きに集れる

評 これは私だけのことは知れないが涅槃圖を見て悲しい氣持はなれない。寧ろ前句同様諧謔さへ感じられる。そうした見方で此の句を見ると「哭きに集れる」が當を得てゐて面白いと思ふ。

涅槃の緣因を無視して寫生した所に新しい特別の世界が展けてゐる。

名古屋 堀 場 典 雄

なにやかと夜學の沙彌に用多く

評 燈火弱しむべき秋、夜學にいそしんである沙彌が、落ちついておられない如何かと難用に追はれてゐる様子が窺はれる。

ひよつとすると舌打の音位聞えて來るかも知れない位である。

山の宿灯を家出して夜長かな

大坂府 日根 倉三郎

小栗屋とありけり萩の旅人宿
山口縣 山本 吐夢仙

尼龍り回向まします鯨塚

京都市 竹内 はじめ

繼踵の紅さよ人を待つこゝろ
小樽 平井 正 念

子等育て上げたる土や秋の色
東京 三野 輪 幸 福

豊の秋老は力になげかるゝ
伯耆 茶 原 周 去

閻王の笏に逐はれて逃げし蚊か
丹波市 寺田 定 信

大屋根の鐵爐も朧も月見かな
丹波市 寺田 定 信

大いなる夜の底ひの館たゞき
名古屋 市 福 田 眞 吉

すゞなりの柿をかむりし温泉宿を
京都府 鈴木 白 舟

起重機クレーンの音ぬれてゐる秋の雨

同 上 松 伸一

秋深しサイレンやにながかりき
雷川縣 日向 法 圓

今朝の空湯氣立つ水を俵へけり
札幌市 銀行 豐 實

櫛が酸くて故郷の山憶ふ
北海道 花田 順 佳

忠靈の菩提を願ひ年のくれ
津國寺月光院 野馬 縣 北 條 義 興

芙蓉咲くばかりなりけり秋更くる
東京 森田 法 見

國雲浮かべし浪のいぶきかな
栃木 萬 壽 玄 海

提燈の蔭の櫛風呂鯉鳴けり
大坂市 森 正 義

埃立つ眞晝の道の整草
同 山 北 國 光

千雀奴が秋のみのりを翫しをり
北支那連都隊 村田 和 男

突撃の兵は、笑み柿赤し
山梨縣 程 原 津 谷

山茶花やいつもしずかな尼の寺
長野市 高野 百 藏

秋彼岸まだあたゝかし穴まどひ
滋賀縣 渡邊 明 道 上

名月の意かよりなる野火あがる
新潟 名 なし 草 女

なに車もなくてかゝりぬ秋の月

京都 永田 七 郎

昨日今日柳ヤナギの冬に入る
滋賀縣 豐田 千 代 子

運動會運動會戸毎くひつそりと
岩手市 長 岡 白 帆

流星を指せる團扇に惑ひけり
京都市 福島 孝 治 輝

夕立のたちまち去りし暑さかな
下 關 關 野 公 孫

體育會體育會興亞の秋の海平ら
滋賀縣 安 藤 正 生

秋の空ふらくと蝶飛びちがふ
山梨縣 程 原 幸 造

藤摘ひして來りけり霜蟹
栃木 大 輪 清

秋雨につめたく櫛を渡りけり
滋賀縣 重 野 ふ み 子

朝しき暮露と映えて紅葉かな
小樽 中 村 る ん

大輪の菊迴廊に逐べけり
横濱市 小 宮 陽 平

瀝船の秋空遠く浮ぶなる
土佐市 戸 町 橋 山 亮 圓

小春日の雛兵雛兵小羊とたわむるゝ
東京 瀧 川 生

飛行機飛行機の觀兵式がたのもしき

投稿規定
官製はがきに「回二回以内」とし「押上」欄郵便局係あてに送ること。



大島・和田・中村三氏

の講話や幻燈で賑つた

東京方面
第二回

誌友會の催し

十月二十三日傳道會館で

本誌前號所載のやうに去る十月二十三日午後六時半から小石川傳道會館で東京方面の第二回誌友會を開催いたしました。この會は平常心ならずも兎角御無音に過ぎ勝ちな誌友相互の

親睦をはかるために開かれたもので、定刻前すでに會場は誌友諸氏で埋まつた程の盛會さでありました。

同會は辻重光氏司會のもとに、一同宮城進邦、卓軍將士武進長久

並に英霊感謝の黙禱によつて始まり、次いで増上寺法主大島徹水大僧正合下が導師となり、一枚起請文の讀誦、同唱十念を唱えました。これが終つて司會者辻氏から開會の挨拶として、只今の本會の狀態を述べ、更に祖傳宣揚に努力するために會員一同が心と力とを合せて一人でも多くの有縁の士を誘ひ、鑽仰運動を旺んにするやう會員獲得についてのお願ひをしました。次に豫定の通り講話に移り

ましたが、最初は本會理事長中村辨康師の「所感」と題するお話で、「新體制によつて國民

全部が精神を入れかえて生活してゆくこととなり、これからの時勢はわれ／＼の腕試しをする好期である」と説かれました。(本文「佛教理念の生活化」参照)

次には日本赤十字社千葉支部附屬富浦演習學校長醫學博士

和田正系氏の「信仰と醫療」と題するお話で、これは和田博士

の實際に毎日経験なさつてゐる患者のお話でした。その大要は「患者は精神と肉體の兩方を患つてゐますので、肉體だけ診ても判らない。そして患者には、自分で病氣を治すまいとするものと治すものとがあり、自分の病氣の中にも佛恩を感じる信仰の人が一番治療し易いし速く癒える人である。」との

まことに興味深い臨床實驗談をなさいました。

最後には

大島徹水台下の「我心傳心」といふことについてのお話がありました。このお話はほんとの誠心があれば、出来ないやうな事もなしとげられるといふことを、御経験なすた色々の實例で話されました。特に田中佛師の信仰心だけで仕事をするとはいふ話は、出席した誌友諸氏に多大の感銘を與へました。

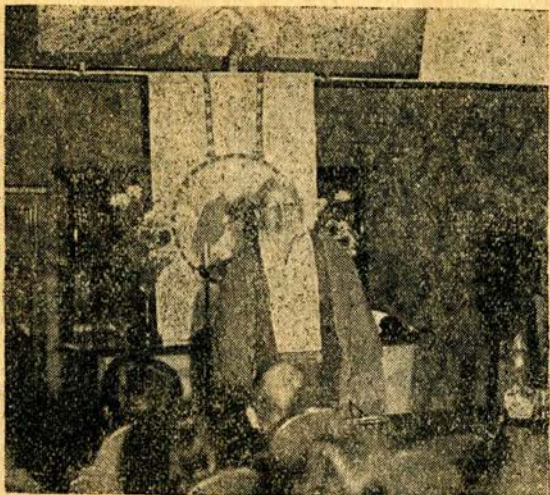
このお話が終つて、大島台下から一同に御十念をさずけていただきました。

ここで一たん休憩して、お茶を飲みながら座談に入りましたが、時間の都合で間もなく

幻燈映寫に移り、本會理事佐藤良智氏の説明で「法然上人の御

「代記」を映じました。この畫は明治の中期頃製作された十二葉連綴のもので、一同その美麗さに見惚れました。

最後に辻重光氏から閉會の辭を述べ、同九時三十分盛會裡に散會しました。因に同日出席せられた



寫眞は誌友會で講演中の大島徹水台下

誌友諸氏は次の通りでした。

大河内隆弘、小橋麟瑞、栗本俊道、島野龍祥、濱野義光、赤尾光雄、中野隆雄、東慈道、長谷川良弘、橋本榮榮、嶋澤信、村田嘉久子、清水龍治郎、倉田直子、平野潤一、山本ふじ、宮澤榮、今井吉三郎、松川義造、丸山蝶、小貫とよ、江原幸三郎、北澤幸太郎、石川巳之助、久野トメ、澤幸江、川崎傳次郎、横瀬アサ子、柳川欣三、小林志津伊藤ふじ、森田きよ、靜川さと田邊まさ、大山よし、志賀忠治、森谷みつ子、馬

上那美、植田實、植田清恵、上野きみ、大森豊子外一名、山本義三郎外二名、兒玉茂雄、奥山まさ子、雪岡えきの、清水いね、田中長葉、深田重太郎、名取幸二、中谷喜太郎、中谷フサ子、上島喜一郎、上島キク世、高瀬磯、渡邊榮子、坂

淨土宗徒は一人残らず

運動に参加せよ

十月廿日 鎌倉光明寺で
信行道場懇談會開催

淨土宗では去る十月中鎌倉光明寺に信行道場を開設してゐました。この道場には

若い修行僧が集り、三十日間夜修養に精進してゐたのです。そこで本會では去る十月二十日午後六時半から主事佐藤賢順氏を初め

本節子、松元秀雄、松元ふじ、長田たい子、米山泉、成田昌信、松立かつ、越智正子、中島松二、吉井光子、代々木利正、田代喜美子、竹中寛蔵、松島徳三郎外二名、佐賀志満、小村常憲、原源祐、嶋田はる、道瀬幸雄、佐藤賢順、瀬秀雄

何ひしました。

先づ佐藤主事から本會について説明し、佛教復興が叫ばれた當時に於て本會が宗祖上人の御人格や

御信仰の宣揚のため具體的方針を決めて御運動を開始したことから始めました。そしてその後漸次會運は隆盛に赴き、彼方ながら實蹟を擧げ、わが國宗教界に

追隨を許さぬまでになり、ますます「祖徳宣揚に努力してゐます」が、今後は時局に相應して大衆の指導性を持たせるといふ方針を明らかにしました。尙最後に本會は祖徳宣揚に目標がある以上、淨土宗に屬する者は、道俗を問はず一人残らず本會の運動に参加して欲しいのであり、この點から一寺院一支部の確立が目下の急務であるに拘らず、未だ會員になつてゐない宗侶や信徒の多數あるのは甚だ残念であるから何うしても各方面の御協力を願つて會員を獲得してゆかなければならぬことを強調しました。

このやうな本會の趣旨並に方針についての説明が終つてから、同道場側の二十五名の若い修行僧達から

熱心な意見開陳がありました。中でも堀田、大橋、兄玉、鶴見、稻田等の諸氏から有益な御意見が何へました。

而してこれら諸氏の御意見は要するに、淨土宗々侶は勿論のこと信徒は何れも、もつと積極的に本會運動を後援すべきであつて、この御運動はわれ／＼淨土宗徒が打つて一國となりいよ／＼廣く祖徳宣揚に進まねばならぬといふこととでありました。それならば何うしたら宗徒をして本會運動に参加させ、もつと力強い運動に参加させることが出来るかといふ具體的な方法について色々と述べられました。これらの御意見に

對して本部側から今後實行したいと考へてゐる方法を説明しました。が、結局只今の有縁の人々が力を合せ、本會運動の擴大強化に努めようといふことに意見の一致をみました。

この席上で議論の中心となつた問題は、會員増加運動の徹底、支部の擴大方法、一寺院一支部確立の促進、「淨土」編輯方針、聯合支部の設置について、地方巡回の座談會講演會誌友會等を開催すること、會員募集の實際問題、御運動遊説隊設置について、本會俱樂部の新設について、會費徵集方法等がその主なるものでありました。中には本宗々徒は一度は無理にでも會員にしたらいではなにか等といふ熱烈な意見もありました。

われ／＼にとつて何うしたら祖徳宣揚の徹底が出来るかとの問題で、すから、それからそれに

議論百出するのもまことに當り前のことでしたが、餘り遅くならぬやうにと、午後九時頃有意義な懇談會を終り、一同佛前に同向して、本部員は同道場を辭去いたしました。

會員だより

◆急しい仕事のまにまに必ず「淨土」を讀んで來ました。私には無二の友であり、尊い嚴師でもあります。この薄い雑誌によつて何れだけ五年このかた強く鞭打たれて來たことか、私の身體に細のやうにからみ、もつて離れず今日まで來ました。今後とも命の限り讀み続けるつもりでゐます。(八王子市横山町、大貫靜子)



佛道の原則から見た念佛

大野 法道

佛道修行の原則は戒、定、慧の三つであると言はれてゐます。之は三學と稱して印度の極めて古い經典にも多く載つてゐますし、佛教の長い歴史に於て、絶えず實際の修行の規範として廣く見守られたのであります。全く三學の道を教へるものが佛教であるといふても差支ないのであります。

ところが法然上人は若い頃に眞劍に道を求められた時に、この三學に見切りをつけられたのであります。その言葉は次のやうに傳へられてゐます。

をよそ佛教多しといへども、詮するところ、戒、定、慧の三學に過ぎず。いはゆる小乗の戒定慧、大乘の戒定

慧、顯教の戒定慧、密教の戒定慧なり。しかるに、わがこの身は戒行にをいて一戒をもたもたず、禪定にをいて一も之を得ず、智慧にをいて斷惑證果の正智を得ず。：こゝに予が如きは、既に三學の器にあらず。この三學の外に我が心に相應する法門ありや、我が身に堪えたる修行やあると、よろづの智者に求め、諸の學者にとぶらひしに、教ふるに人もなく、示すに輩もなし。

之は佛教の説く所に道を探り求めて、しかも満たされぬい悩みを、烈しく感ぜられた告白であります。その中心となるものは、佛教で種々に説かれる戒定慧は、迎も自分には實行できぬことであるから、三學でない外の道が無いものであらうかといふことであります。

しかし考へてみれば、かうした求道の心には次のやうな

大へんな意味が含まれてゐることを見逃がすことはできぬと思はれます。それといふのは、佛道修行の原則と定まつてゐる三學を去つて、別の道を見出さうとすること、千何百年といふ長らくの間、佛道の規定となつてゐるものを、わが身に引き當てて役に立たぬと見限つたことであります。まことに大きな三學拒否の求道の心であります。またこの中には求道に際して何の遠慮もなく、心の底の叫びを端的に言ひ表はされた純真さが見られると思ひます。宗教は人間の魂の本當の落ちつき場所を與へるものでありますから、求むる心が上たりであつてはなりません。妥協や素通りであつてはなりません。どうしても偽りない自分の心にひびく所を憚りなく聲に出すのでなければ、力ある信仰は得られないでせう。

二

法然上人はかやうに三學を見限られてから、その後、求めつて遂に念佛の道を見出し、こゝにわが身に相應した佛道の修行ありとして、いかなる人にもこの道を説かれ、驚くべき偉大な感化を日本人の心に植えつけられたのであります。

こゝで考へねばならぬことは、上人の求道が三學を見限つて、三學の外のものを求められた結果に見出だされた念佛であるが、この念佛は果して三學の外のものであるかといふことです。もし外のものであるとすれば、念佛は佛道の原則をはづれたものとなり、また念佛を佛教の眞の道とすれば、三學は眞の道を離れたものとなる。然るに古くから佛道の原則と言はれてゐるものがそのやうな無力なものとと思はれないこともあるから、念佛の信仰に立つものはこゝの所をよく考へて置かねばならぬと思ひます。

そこで三學なるものが何であるかを見る必要があります。之は佛道の三原則と言はれてゐますが、實は佛道以前のものであります。佛道以前といふのは、佛の道に於て始めて見出だされた人間の道ではなく、佛の説法であるか否にかゝりはらず、戒定慧は本來人間に即いて居る修養の原則と言ふことです。

慎みと勵みを缺いてはならぬ……戒

一心でなければならぬ……定

正道を見失つてはならぬ……慧

この三つのものは、人間である限り何時でも、いかなる人でも、いかなる場合でも缺くべからざる自然の道である

ことは明らかなことであります。佛教はこの自然の道に依つて三學を説くのでありますが、その説くところが種々複雑なものとなりました。前に掲げた上人のお言葉の中に出てゐるやうに小乗、大乘、顯教、密教の三學が説かれるやうになりました。こゝでその一々を解説することは見合はせませんが、戒だけに就いてみても、小乗では在家の人は五戒を守るべく、出家の比丘は二百五十戒、比丘尼は大略五百戒、沙彌(小僧)等は十戒、式叉摩那(尼さんの小僧の一種)は六戒を守るべきだと説き、大乘では三聚淨戒(攝律儀戒——一切の惡をせぬ、攝善法戒——一切の善をする、攝衆生戒——世のため人のために働く)を守るを説くそれらは顯教であるが、密教ではまた三摩耶戒、菩提心戒といふことを守れと説きますやうに、それぞれの宗派では三學の修行について特別のやり方を説いて居ります。

三

法然上人はこれらの三學のやり方を見、それを我が身に引きあてゝどのやり方もびつたり來ないことを感じられたのだと思はれます。されば上人が見限られたのは戒定慧そのものではなくして、その修行のためとて、澤山に積り

重ねられてゐる種々な型でありました。それらの型に依らずして、しかも三學修行のできる道がないものであらうかと、之が上人の目指されたところと思はれます。また更に進んで、上人は三學そのものも人間の修養に不可欠の三原則であるにはちがひないが、それが三つのものとなつてゐては一心になりきれぬ。人間に力ある心の底にかむべきは一つのものであるべきを思ひ、遂に三學の外の唯一のものを求められた結果、「たゞ念佛」の道が見出だされたのであると思ひます。

それでありますから、念佛は三學の修行の外のものではなく三學の本となるものでありますから、念佛申すところに自然に戒も定も慧も顯はれるに違ひないのであります。佛とともにある我が身の信仰をもち、佛力のこもる念佛申す者が、どうして人の道にはづれた非道のことをすることができませう。大慈悲の心に燃えて衆生を護りたまふ佛を信する者が、どうして我が務めに勵みを缺くことができませう。又現當二世を貫く永遠の命の道として念佛申すところには一心もあれば正道の見定めもあるものであります。三學の形に依らずして、しかも自然に三學を成就する念佛の、不思議の力を喜ばすには居られないのであります。



佛敎理念の生活化

生活樹立に祖先傳來の腕試し

中 村 辨 康

ただ今は我國に取つてまさに古今未曾有の重大時局に際し何うしても舊體制を破つて新しい體制の下に進まねばならぬ御時世となりました。私達は是が非でも力を合せ心を一つにしてこの重大時局を乗り越え、新しい秩序の建て直しをしなければならぬとなりましたのです。

一體わが國は天の岩戸隠れの時を初めとして、神武建國景行統制、聖德憲法、大化新政、平安奠都、源平争亂武家執政、蒙古來襲、群雄割據、幕政鎖國、明治維新等の數々の困難を経て來ましたが、何れも御皇室のよりよき御指導と國民の努力とに依つて之れを切り開き常に進展を續けて参つたのであります。それは何れも舊い體制を破り新しい組織を以て出直しをしたのであります。その中でも最も大

きいものが三度あつたと思ひます。その一つは氏族が跋扈を極めた時であります。この氏族の力を撓めて天皇中心の體制に改め、新たに憲法を御制定になり、國民の歸趣を明らかにしたのは、攝政であらせられた聖德太子の御力でありますが之れを基準として遂に大化の新政を樹立遊ばされたことは、數代おかゝりになりましたけれどもこれこそ神武建國以來最初の大きな新體制確立であつたと思ひます。更に奈良朝のあと都を新たににして、新體制を布かねばならなかつたこともありましたが、その貴族的な公家政治が餘りよくなく漸く廢頽致したので又た／＼民間から大いにその大改革が叫ばれ、遂に武家の擡頭となり、源平二氏の騷亂となるに到りましたが、結局鎌倉幕府と云ふ新體

制の樹立を見て落ちついたのであります。これが第二期とも見るべき大きな改革變動であつた譯であり是れまた相當の永い時間を要したのであります。この時に當つて、宗教的天才たる法然上人が現れまして一大宗教革命をなさいました。それまでは貴族の手にのみあつて一般民衆とは殆んど縁のなかつた佛教を、民衆の中に一般社會の中に廣くぶちまけ民心の動搖を喰ひ止めたのであります。それまでは支那から傳來した佛教であつて、傳敎、弘法に依つて日本的に訂正されましたけれども、尙ほ支那依存の觀念が強かつたのであります。それを純粹國產の宗教として我が國民性にびつたり合つた簡單明瞭な條件を以て萬人の總べてが均しく救はれるといふ淨土の敎を唱導せられましたので茲に初めて佛教が民衆化されたのであります。ルーテル宗教革命に先き立つこと實に四百年の前に於てこの法然上人の叫ばれたわが國のこの宗教革命は、實に政治の上にも思想の上にも文化の上にも誠に大きな變革を與へたのであります。不思議なことにはこの時が歴史の年代の上からみて、神武建國と明治維新との丁度眞中の年數に聖德太子の憲法があり、その聖德攝政と明治維新との眞中の年數に丁度此の政治の新體政と宗教の革命とがあつたことは何事か

を示唆するものとして興味深いものを感じざるを得ませんが之れが第二期の大きな新體制であります。

第三期の新體制樹立は、幕末から始まつて明治廿三年の憲法發布に至る明治維新であります。これは申すまでもなく武家政治たる幕府を倒して王政復古をなし近代的な立憲政治を樹立したものであります。これ亦た幕末の混亂時代から數へると相當の年數を要したのであります。誠に大きな維新改革であつたのであります。しかし歐米の物質文明が盛んに流入致しまして、利己主義自由主義個人主義が濃く厚く國民の中に浸潤し、我國本來の大精神たる滅私奉公の念がうすくなつて來ましたことに大いに注意されねばならなかつたのであります。この西洋文化の影響による新しい風潮は、逆に國運の進展を妨げるやうになつて、しばしば昭和の維新が叫ばれつゝあつたのでしたが遂にここに一層新たな一大改新を斷行せねばならなくなつたことは御承知の通りでありまして我が國と致しましては是れが第四期目の新體制樹立期にはいつたと言はねばなりません。私達この將來の大發展をなすべき時代に遭遇致しましたのは全く絶好の時に生れ合せたものであつて、先祖傳來の腕試しをなすべき最も大きな光榮を與へられつゝあるのだと

考へるのであります。

新體制は今はその第一歩を踏み出したのに過ぎません。これが確立するまでには今後十五年、二十年を要するものと云はれますが、とに角容易ならぬことでもありますから、從來の例から眺めましても相當長い年數を要するものと思はれます。又た從來の新體制樹立は若干の犠牲に依つて行はれたのでありましたが、今度の新體制は國民全部の個々に於ける精神的大革命を必要としてゐるのであつて、民衆それ自體の思想が全然新らしく入れ換られなければ完成されないものであります。従つて從來のものより更に一層困難な大事業であるといはねばなりません。

新體制理念はまだ一研討を要するものがあると思ひますが、今までに言はれて居ることは國民全般の公益優先、減私奉公、職分奉公、多數決の否定、大政翼賛等であります。しかしこれ等のことを詳さに考へてみますと、實は今まで佛敎の主張して來たことであつて何等異なるものではありません。たゞ私達の力が足らず、民衆が心から納得して呉れなかつたものばかりであります。即ちこれまで佛敎が斯くせよと常に聲をからし口をすつぱくして主張して來た

ことが取り擧げられたのであつて、今は國の力を以て國家存立の必至要件として、國民全般にその實行を促してゐるもののみであります。

佛敎では、自利即利他を主張して居ります。その自利は物質的自利ではなく、全體の一部分としての眞實なる自利であります。自利と利他とは並べて考ふべきものではなく、全分利他の中に正しい自利のあることを教へるのであります。従つて利他即自利であり自利即利他であつて、對立的若しくは併立的のものでは正しいものとは云はないのであります。然し之を實踐するに當つては自利よりも利他を主とすべきことを教へて居るのであります。つまり私達が餘りに自利を主張したがるからであります。布施、愛語、利行、同事の四攝法も、無我、忍辱、慈悲なども皆それであります。知恩報恩と言ふ言葉も減私奉公、職分奉公、公益優先のことに外ありません。從來佛敎では常に斯様なことを主張して來たのであります。然るに多くの人は、唯だこれを理論として受け取り理想として受取り、又は雲の上のかなたの話として受取つただけでありました。ですから少しでも多くの利益を擧げようと競争してゐる實際生活には當嵌らないものと考へてゐたやうであります。

とも、何んだか遠い彼所の話のやうに思はれますが、實はこの意味に於いて私達の新體制に邪魔した日常生活の根本基調となるものであります。

また總力を擧げて高度國防國家を建設してゆくには、何うしてもシツカリした一つの信念がなくては永續しません。私達が阿彌陀さまを中心とする念佛の信仰によつて生活してゆきますことは現實的には陛下を中心とする日常生活であり、常に淨土を目指す心は現實には日本をして理想國家たらしめんとする念願に燃えることになります。從つて天皇中心の國家新體制の樹立は、念佛による生活樹立と結合して彈力性を持ち得る譯であります。

從來とかく宗教の話は理想であつて、現實とは違ふものとされ勝でありましたし、また一面現實に類例を求めることが困難でありましたから、理解が極めて困難でありましたが、今や老若男女を問はず皆なそれらが足下の事實となつて現れ出てまいりました。

理想ではなく事實問題として直ちに實行してゆかねば自分の身のため時代となりました。新體制の運動は、私達が人間としてほんとうに生きることの運動であります。これからは私達も説教や講演に理論でなく本當の現實的な

事實としてお話し得る時世となつたのであります。御時世の然らしむるところ他から云はれても云はれなくても、又た自分が知つてゐても居なくても斯くせねば國民として生活してゆけぬこととなつたことは誠に隔世の感であります。考へて下さい。

嫌や／＼追隨して行くものは乗りおくれるばかりでなく自らをも苦しましめ、國家の進展をも喰ひ止めるもので、むしろ國家に取つて不忠の臣と云はねばなりません。之に反してハツキリした認識と信仰とを以て率先して大政翼賛の生活をなすならば是れ臣道を完ふするものであつて、一日も早く國民の一人一人が正しい理念を以て生活して行くやうにしたいものであります。

道は近きにあり。何うぞ實際問題として受取つて下さい。佛教に言ふところのことを段々實際問題として理解するやうに努めて下さい。

それと同時に佛教信念の正しい把握が一層必要な御時世になつたことを痛感して下さい。以上はたゞ最近の感想の一端だけであります。

編輯後記

◇我々はあひ難き祝典に生れあひ、祝ひの意義、感激を正しく、深く理解自覺し、以前になき精強な働きをせねばなりません。これを思ふとき、我が會は愈々お互に磨み合ひ、助け合ひ、淨土建設に精進を續け、以て聖壽萬邦に輝かねばならぬのみです。

◇歴史の轉換、未曾有の時局下に、我々は皇紀輝く二千六百年の祝典に生れあはせ、聖恩の深きこと、海よりも、高きこと山よりも感激の涙、自らにじみ出で、おのづから嚴肅の中に、足の踏む所知らずの感にうたれました。

◇祝ひ終つた、さあ働かう。

◇各種の鑽仰運動の催しも會員各位の御後援で何れも盛大であつたことを心からお禮申し上げます

◇今後は各所に於て催す計畫をたてゝゐます、その節は何分宜しくお願いいたします。

◇實力ある中堅の各位を網羅して一水會が生れ、積極的な鑽仰運動の實踐と御指導をなさつて下さることとなりました。將來は京都大阪等にもこのやうな本會の外郭運動ともなるものが出来ればよいと願つてゐます。

◇紀念すべき年を送るに際してこの年の意義を新春に向つて擴大しようと思つてゐます。

◇吉田綾二郎、佐藤春夫兩先生は相變らずお元氣ですが、兩先生の御都合で休載させていただきます。

◇鈴木淨海氏の「世の父母に捧ぐ」は少年の不良化が問題になつてゐる折から、同氏の實際に取扱つたものだけに、子を持つ父母にとつてよい參考になります。

◇古屋登代子女士は北京同學會

と國際文化振興會の共同主催による日本文化講座から招聘されて十一月二日神戸を出發せられました。御健闘を祈ります。

◇本會の事務も春以來大馬力をかけて整理致しておるので、大體完了に近づいております。しかし、なほ從來の滓が幾分残つておつてそのため時々讀者からお叱言を頂戴してゐます。事務員は本會の體制整備を目標に一意邁進しておりますので、いたらぬ處は御遠慮なく叱咤鞭撻して頂いて事務強化に御助力をお願い致します。

◇會費の徵集法もまた合理的組織的と云ふところまで行つておりませんが、來春までにはこれも完成したいと思つてゐます。そして前納制の徹底を期してゐますのでこれまた切に讀者の御援助を期待いたします。

◇廣告掲載については直接本會庶務部にお問合せ下さい。

淨土 十二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年七月三日印刷納本
昭和十年五月一日發行
(定價十二錢)

東京市芝區芝公園五號地一〇
編輯兼 眞野 正 順
發行人

東京市芝區芝公園十五號照會館
印刷人 赤尾 光 雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社
發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

㊦ (送料五厘)

會費 金一圓二十錢

一ヶ年 (送料不要)

大正大
學教授 大野法道 本會理事長 中村辨康 關西大學教授 前田聽瑞共著

淨土宗讀本

淨土宗の教義、信仰、歴史、實際！ 即ち淨土宗がその中に持つ凡てのものをだれにも解るやうに、しかも立派な體系のもとに説いたのがこの「讀本」です。著者は現淨土宗が誇る第一流の理論家と信仰家で、後世に残る定本とするために共力してなつた苦心練磨の結晶です。管長郁芳隨園貌下は序文を、金戒光明寺法主望月信亨台下は表題を進んで御染筆下された教界の指導的讀本です。三度び版を重ねてなほ足らざる實行はまた本書の眞價を實證してゐます。

發行所 法然上人鑽仰會

東京芝區芝公園 明照會館
振替東京 八二一八七番

菊判四五〇頁・總クロース装
本文五號 數 葉 入
定價 二圓五十錢
送料 二十一錢
(朝鮮・臺灣・滿州・樺太 四十九錢)

『淨土宗讀本』內容
—— 第一編 歷史 ——

- 第一章 釋尊の生涯
- 第二章 佛教の發達
- 第三章 法然上人傳
- 第四章 二祖から現代まで

第二編 教義

- 第一章 淨土の教義
- 第二章 信仰の對象
- 第三章 西方の淨土
- 第四章 信仰の獲得
- 第五章 念佛の意義
- 第六章 念佛の生活
- 第七章 念佛と日本精神

第三編 實踐

- 第一章 生活要素としての念佛
- 第二章 信仰を方向づける爲の宗派と寺院
- 第三章 寺院の構成及び機能
- 第四章 信仰修養に必要な諸準備
- 第五章 信仰修養法としての行儀
- 第六章 人生の最大儀禮
- 第七章 祖先への報恩行
- 第八章 信仰増進の方法

淨土 第六卷 第十二號

(停)

定價 金十二錢 (送料)
滿鮮臺等 金十三錢 (五厘)
外地定價

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十五年十一月廿日印刷納本 昭和十五年十二月一日發行